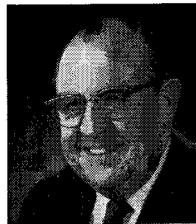




心の糧

十二使徒評議員会補助

ジェームズ・A・カリモア



少し前に、1人の友人が仕事の上での興味ある経験を話してくれた。その友人は前に合衆国東部のある学校の校長をしていた。ある日校内を巡回していると、あるクラスで、教師が感謝を表わす絵を描かせていた。子供たちは皆一生懸命自分の作品と取り組んでいたが、その中に、1人だけ考えこんでいる女の子がいた。友人はその子のそばに行き、何かわからないところがあるのかたずねた。するとその子は「はい、神さまはどう描いたらいいの」と言った。その子の絵には、山と木、それに木の下で感謝の祈りをささげている男の子が上手に描かれていたが、彼女は神をどう描いたらいいかがわからなかったのである。私の友人はすぐさま、神は人間と同じで、人間が神のかたちに創造されたことをその子に話した。

人はどこにあって、神がいかなるものかについて迷っている。神に対する奇妙な、理解し難い概念が一見人を啓発するために教えられるが、そのあいまいさがますます人を迷いへと導くのである。

私は、我々の神に対する信仰、義の業、目的の誠実さ、これらはそのほとんどが神に対する我々の概念や理解から定められたものであることを心から信ずるものである。その女の子が神を描こうとした時のように、もしも私が神を心に描けず、また本当によく知らなかったならば、私の信仰はいかにして強められるのだろうか。知らないものにどうやって心から祈ることができるだろうか。

神を知ることは正に「永遠の命」(ヨハネ 17:3)である。神は個性を持ちたまう御方であり、我々の霊の父であり、我々は神の子供であり、神は我々に関心をよせたもう。そして、神のみ前に再び帰り、共に永遠の命を受けるための大切な計画があるのである。

— も く じ —

しかして教えよ.....	副管長	ハロルド・B・リー.....	97
良き教師は大切な存在である.....		マリオン・D・ハンクス.....	100
高価なるもの——無知.....		ハートマン・レクター・Jr.....	105
見分ける力.....		ウィリアム・H・ベネット.....	108
主の民は啓示を受ける.....		ブルース・R・マッコンキー.....	111
富裕の律法.....		フランクリン・D・リチャーズ.....	114
西部へ行く.....		メアリー・プラット・パリッシュ.....	117
リーハイ.....		メイブル・ジョーンズ・ガボット.....	120
マダリンのみたゆめ.....			122
聖霊はいかにしてあなたを助けるか.....		S・デルワース・ヤング.....	125
現代の社会問題.....		ウィリアム・E・ベレット.....	128
流行と信仰.....		ペギー・ホーキンス.....	131
質疑応答.....			135
帰郷.....		メアリー・エク・ノールズ.....	138
ローカル・ニュース.....			143

末日聖徒イエス・キリスト教会

大管長会

大管長

ジョセフ・フィールデング・スミス

第一副管長

ハロルド・B・リー

第二副管長

N・エルドン・タナー

大祝福師

エルドレッド・G・スミス

十二使徒定員会

スペンサー・W・キンボール

エズラ・タフト・ベンソン

マーク・E・ピーターセン

デルバート・L・スティブレー

マリオン・G・ロムニー

リブランド・リチャーズ

ヒュー・B・ブラウン

ハワード・W・ハンター

ゴードン・B・ヒンクレ

トーマス・S・モンソン

ボイド・K・パッカー

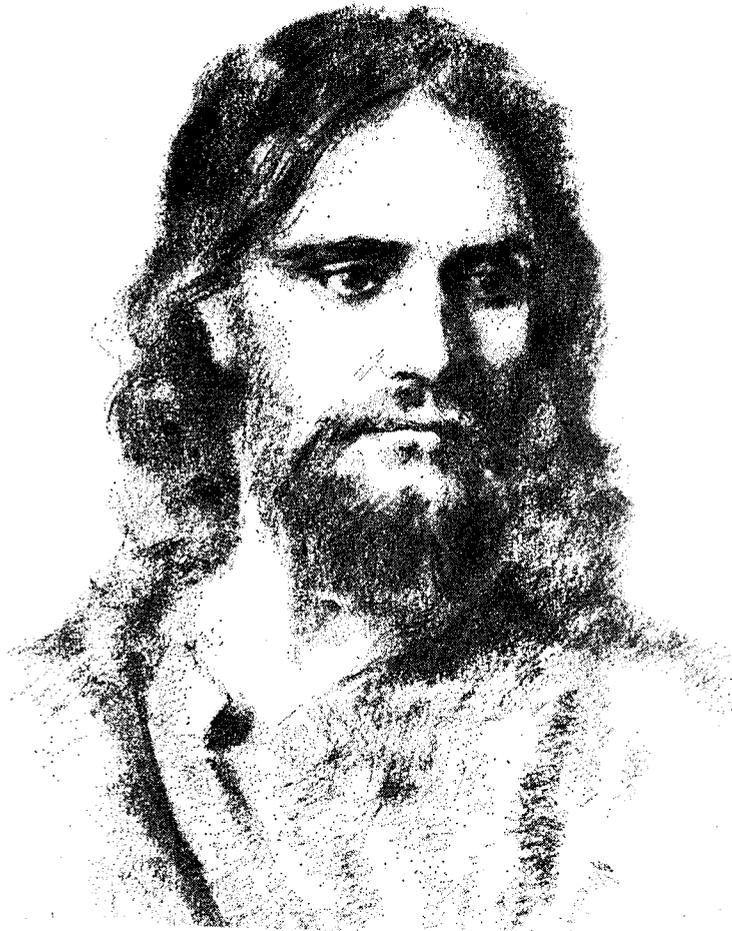
マービン・J・アシュトン

今月の表紙

今月の表紙は、ハリー・アンダーソンによる2人の強盗の間ではりつけになったキリストの絵である。この出来事に關する聖句は裏表紙に記されている。

聖徒の道

1972年3月20日発行
 発行人 マービン・S・ハーディング
 発行所 東京都港区南麻布5-8-10
 末日聖徒イエス・キリスト教会
 電話(442)7459
 印刷所 太陽印刷工業株式会社
 定 価 100円
 予 約 一年間 1,000円
 外国 4ドル50セント



『しかして教えよ』

ハロルド・B・リー 副管長

数年前、あるステーク部大会で故 J・ルーベン・クラーク・Jr. 副管長は、教師にとっては意味深長な言葉を、また若人には約束をこめて次のように述べている。

「教会の若人は主の言葉に飢えている。教師であるあなたがたは、必ずこの若人に『生命のパン』、すなわち、イエス・キリストの教えを与えるよう準備せねばならない。もし若人がキリストの教えにそって生活するならば、今まで夢見ていたよりさらに大きな幸福を得るであろう。」

教会内の組織で教えるよう召されている数多くの人々が、教育に対し正式な訓練を少しも受けておらず、またそのことを求められてもいないことを心

にとめる時、では彼らは、どのようにして教えるよう備えられたのであろうか。

教義と聖約の啓示の中で、主は律法を与えておられる。

「この『みまは』は、信仰の祈りによりて汝らに与えらる。而して汝らもし『みたま』を受けざる時は教うべからず」(教義と聖約 42:14) 教師はどのようにしてみたまを受けるのであろうか。

「求めよ、そうすれば、与えられるであろう。捜せ、そうすれば、見いださるであろう。門をたたけ、そうすれば、あけてもらえるであろう。」

すべて求める者は得、捜す者は見だし、門をたたく者はあけてもらえる

からである。」(マタイ 7:7-8)

主は教えを受けようとやって来た群衆に、このように話されたのである。

私は過去に多くの教師の影響を受けた経験があり、そのうちの数人は、成長期の私に、また後の教師の時代にも深い印象を与えてくれた。その1人であるハワード・R・ドリッグズは、教え子たちに、あとあとまで続く教えを残し、特に、偉大な教師イエスの記録から良き教え方の例を引用した。イエスは良い教え方について原則となるものを示された。

1、イエスは神と神の子供らを心から愛された。

2、イエスは人類のために働き、人類を救う自らの召しに燃えるような信

念を抱いておられた。

3、イエスは人間に対し、また人間が必要としている大切なものについて明白で思いやりある理解を示された。

4、イエスはたえず熱心な研究の徒であった。イエスは「律法と予言者」に通じておられた。イエスはその当時の歴史と社会情勢に通じておられた。

5、イエスは真理を見分けることができ、その真理を支持することに譲歩されなかった。

6、イエスの単純な言葉は、あらゆる階層、あらゆる状況の人々の心を捕え、感動を与えた。

7、イエスの創造力は、いつの時代にも教えを生きたものにしてている。

8、イエスは、人々を正義に飢え渴く者とされた。

9、イエスは、積極的な善を行なうこと、すなわち、人を高揚するのに福音を適用するよう励まされた。

10、イエスは、生活によってご自分の信仰を絶えず勇敢に示された。

さきに教義と聖約から引用した律法の中で、主は建設者すなわち指導者、教師、または宣教師となる者のために3つの要点を明確に教えておられる。

「またわれ汝らに告ぐおよそ誰か権威ある者より聖職に按手任命され、またその者の権威を有てることと、教会の長たる者たちより正式の按手聖任を受けたることとが教会員の知る所にあらざれば、何人といえどもわが福音を宣べんために出で行くこと、または教会を創立することを許されざるべし。」

「また当教会の長老祭司および教師たちは聖書と完全なる福音を載せたるモルモン経とに誌されたるわが福音の原則を教うべし。」

「また彼らは誓約と教会の信条とを

守りてこれを実行すべし。而して彼らは『みたま』に導かるるまま以上のことを以って教えとなすべし。」(教義と聖約42：11-13)

このように、ここには教師となるための主要な要素が示されている。すなわち、第1に、正しい権能により召され、聖任されることであり、第2に、福音の原則を教えるよう命じられており、第3に、教えようとするすべての人に対して模範となる生活をするものである。

次に最後の要素としては、ただ霊によるほか教えることができないということである。これは、もし人が神の王国の建設にあたって教師になりたいと思う場合の重要な資格となる。

「この『みたま』は、信仰の祈りによりて汝らに与えらる。而して汝らもし『みたま』を受けざる時は教うべからず。」(教義と聖約42：14)

私は幸いにも自分の家庭で、永遠の伴侶として2人のすばらしい教師に恵まれた。2人の妻が教え、模範を示すのを見て、また私が教師として、教会の指導者として自分で経験したことからいくつもの大事な教えを学んだ。

教えるように召されたこの2人の妻は、バプテスマの祈りに慰め主、導き手として聖霊の賜を与えられた。2人ともそれぞれ権能を持つ人から召された。

2人の妻は、頭の上に手を按かれて1つの仕事に任命され、次のような祝福を受けた。それはその職に召されている間、忠実であり、主のみたまの導きを求めるなら、必要に応じて導きと靈感、または識別の賜物を受けるというものであった。その後この2人の靈感に満たされた教師が実際に生活で経

験した事柄は、忠実な働きによって、いかに神聖な祝福を受けるものであるか、また、みたまによって教える者の努力が、いかに尊い生命を作り上げてゆくものであるかを物語ってくれる。皆さんの参考になればと思い、彼女らの「経験の書」から2つの例を取り上げてみたいと思う。

その1つは、気高い血統に生を受けられた選ばれた娘が、若い時に靈感あふる祝福師の按手によって祝福を受け、次のように勧められたのである。「忠実に学ぼう、努めてあなたの心を用いるように。熱心なる祈りによって主に求めるように。そうすれば、あなたの心は、あなたが果たそうとする働きにより、喜びと満足で満たされるであろう。あなたは幼い子らを教え、彼らが青年、成人へと成長するのを見守ることに大いなる喜びを受けるであろう。あなたは彼らの愛を勝ち得て、それはあなたの働きに十分に報いるものとなるだろう。」

教師である1人の妻に宣言されたこの祝福は、後にうろわしく実現し成就したのである。彼女は若く、人生を愛していた。誘惑が幾度となく訪れた。しかしいつも彼女の目の前には、彼女を信頼している子供たちの顔が浮かんだ。彼女はその信頼に応えるために正しく生活しなければならぬと悟った。

制服を身につけたある学生が、彼女について「最もすばらしい教師でした。私を信頼してくれました。」と語ってくれた。その朝は苦しい朝だった。その若い教師はレッスンをうまうまいったかどうか心配して気落ちしながら教室を出た。1人の少年がその教室から出てきて足早に彼女のかたわらに

歩み寄り、「けさのレッスンは本当に良かったですね」と言って、彼女が持っていた「キリストの生涯」という美しい表紙をした本にうらやましそうな目を向け、さらにこう言った。「もしこの本を持っていたら、質問にも答えることができたんだけどなあ。」

「私ので良かったら持っていらっしゃい。」彼女はそう言ってその本を差し出した。

「えっ、いいんですか。ありがとうございます。」

彼はまるで抱くようにして本をとった。その顔には感謝以上のものがあつた。彼女はあとになって、その少年が家族が多く、本もなければ壁などには絵もかけていない家から通ってきているのを知った。少年はその本のような内容のものに飢えていたのである。少年は次の日曜日、大切にその本を包んで彼女のところへ返しに来た。彼はその本を読み通し、少しも汚したり傷つけたりなどしていなかった。そう、彼女はこの少年を信頼していたのである。

私のもう一人の良き伴侶は、若い時に予言とも言える召しを受けたが、彼女はその神聖な祝福で次のように約束された。「教会で働くよう召される時は心から謙遜にそれに応えるように。その働きによって、神の言葉を知り、悟るがゆえに、また神の言葉を他人に教える力を受けるがゆえに、喜びがあるであろう……あなたは、平和の使者となり、多くの家に喜びと感謝をもたらすであろう。あなたは病む人を慰める人となる。あなたは、罪ある者の心から重荷を取り去る助けをなし、あなたの声は、疲れて重荷を負う者に慰めと希望とをもたらす、かくしてあなたは彼らを主イエス・キリストへと導く

者となる。」

このもう1人の偉大な教師は、ある少女が女性としてうわしく花咲こうとしている時に、教室を越えて品性の大切さを教えた。彼女はこの少女にとってまさに悲劇に終ろうとしていた人生を、みごとに、花咲かせたのである。彼女は母親のないこの子の歩みを導き、みなしごを美しい少女に成長させ、やがて交際のあり方を教え、神殿結婚へと導いたのである。私はかつて妻であるこの教師について次のように書いた。

「彼女は多くの子供の心を開く鍵をもっていた。この秘密を教師に教える才能をもっていた。彼女の子供との対話は聞くにうわしいものであつた。彼女のその巧みさと理解度は、生涯勉強した児童心理の知識とその応用から生まれ出たものである。彼女は他人に理解されない子供に絶えずその手を差しのべたのである」

教育のすべてが教室でなされるのではない。まことの教師は常にその人格が問題となる。彼女はどこにあつても生徒たちの教師であつた。生徒たちの目はいつも彼女の上にあつたのである。

物事には必ずその反対がある。「すなわち、禁断の実に対しては生命の木があつてこれは甘くかれは苦かつた。それであるから、主なる神は随意に行なう自由を人間に許したもうた。しかし人間はもしもあれに誘われこれに誘われなければ随意に選り行なうことはできないのである。」(Ⅱ ニーファイ 2 15-16)

「わたしを愛するか……わたしの羊を飼いなさい」これは、復活された主がペテロに語られた言葉である。主の

羊を飼うよう召されて、主から権能を受けた者により按手任命される教師は、なんと素晴らしい特権を与えられていることだろうか。クラーク副管長が「教師であるあなたは教え子らの愛を勝ち得て、それはあなたの働きに十分に報いるものとなろう」と言われたように、教師の生活はなんと祝福されることだろうか。

そう、この2人の教師は、この言葉が真実であると証することができるのである。小さな教室で始まった触れ合いが、年を経て教師と生徒という間柄以上の友情へと成長したのである。この友情は、相互の愛と理解、また初めて彼らをひきあわせたイエス・キリストのすばらしい福音を通じて育まれた。「しかして教えよ」というチャレンジを受け入れる者にもたらされる「あふるる報い」とはこのようなものなのである。

最近のある講演で、全国的に知られているある講演者が、しめくりに次の3点を表明し、教師の働きを強調した。

「教師とは、生きている粘土で人間を作り上げる彫刻家である」

「若い人は特に順応性があり、正しい教育によって、正しい原則を教えることができる」

「もし、あなたは今の世界の様相を変えたいと思うのなら、人の心を変えねばならない。」(カール・S・ウインターズ博士、ソルトレーク・トリビューン紙、1971年3月24日付)

私はすべての教師が、自己の召しの大切さのみを感じるのではなく、人の心と魂を向上させる偉大な機会にあずかっていることを悟るよう祈るものである。

良き教師は 大切な存在である

十二使徒評議員会補助

マリオン・D・ハンクス

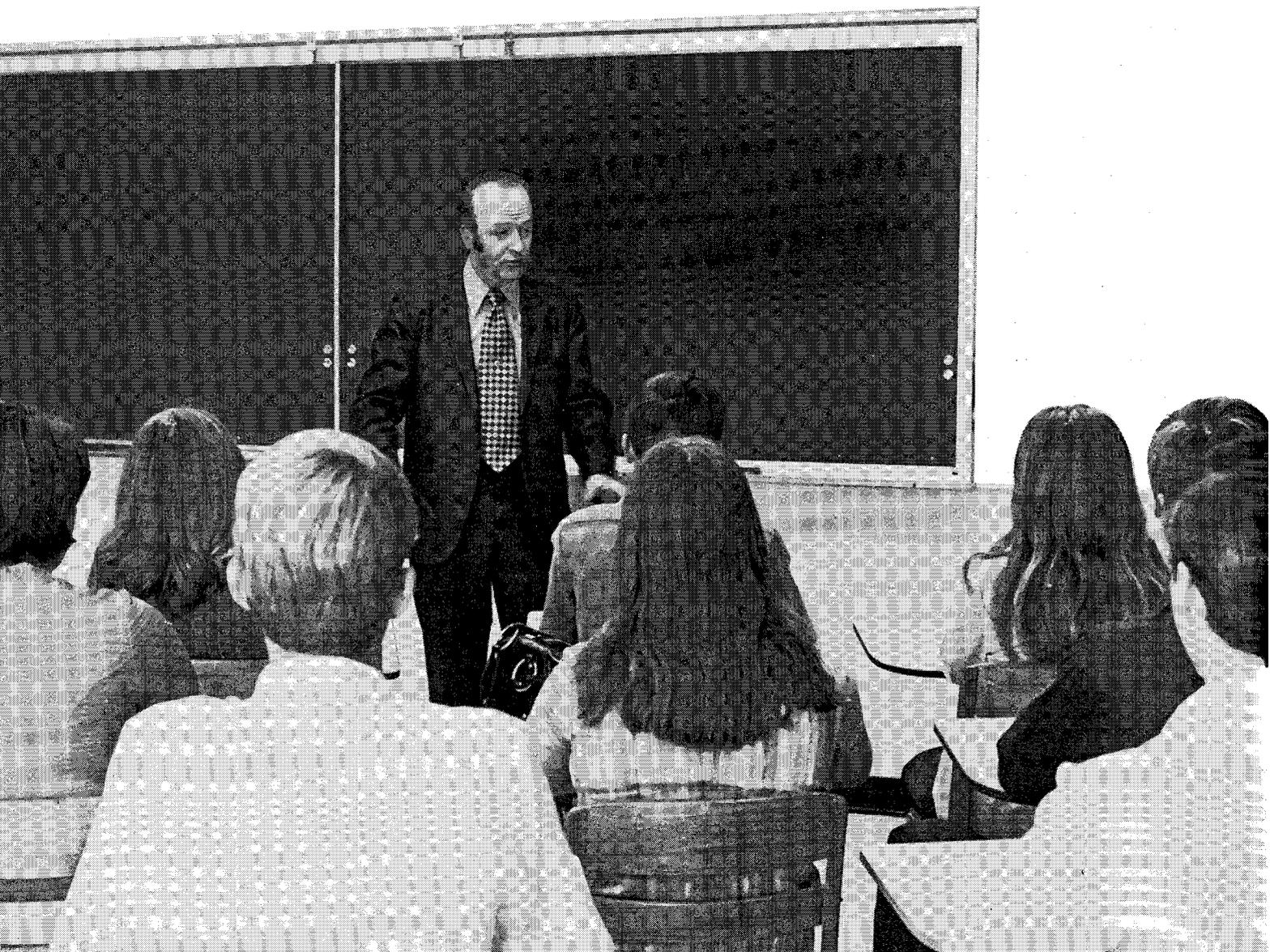
よく知られている福音の原則を簡潔に教えるのに、最近の出来事を取りあげる余地などはないと信じている教師がいるのではないだろうか。私は、この二者にはかかわりあいがあると信じている。教師として、我々は成長を続け、絶えず目を覚まして我々のまわりの世界で何が起きているかを敏感に察知してゆく責任がある。

知識を絶えず伸ばしていくのは、福音の教師にとって肝要なことである。

新聞や良書には、我々が知る必要のある最新の実例や教訓が掲載されている。もしそれが良い本であ

れば、そこに述べられている原則は、人生に対し新しい展望を開いてくれ、我々が教える原理、原則を補強し、強調し、強化してくれる。

いつの時にもそうであったように、教師は大切な存在である。およそ100年程前、エマソン¹は有名な次の言葉を残した。「昔は木製の聖餐杯に金の祭司であったが、今は、金製の聖餐杯に木製の祭司である。」エマソンはこの言葉にある意味を持たせていたに違いないが、しかしこの比喩は多くのことに応用できる。もちろん、教育についてもあてはまる。もし我々が金製の教師でありたいと望み、熱心



に勉強し、喜んで代価を支払うなら、金製の教師となることができるのである。

教師の間には違いがある。幾世紀も前に、ある人が次のように言っている。「キケロ²が語る時、人は『なんと雄弁なのだろう』と言い、デモステネス³が語る時、人は『さあ、行進しよう』というのである。」教師は重要である。

我々は教える者に手をさしのべ、友人となって愛する責任がある。ラスキン⁴は言っている。「教育とは、その人が知らないことを教えることではない。それはその人が実践していないことを実践するよう教えることなのである。若者に文字の形や数字のトリックを教えるだけで、彼らが数学をいたずらの道具に、また文学を肉欲へかりたてるものに変えてしまうのを放置しておくのが、若者に対する教育ではない。それとは反対に、完全に実行できるように、また肉体と魂の節制を図れるように若者を訓練するのが、教育なのである。親切に見守って、訓戒を与え、教訓、賞讃および模範によって教えることは、容易なることではなく、その上繰り返しやらねばならないことである。

デビッド・O・マッケイ大管長は次のように書いている。

「では、真の教育とは何か。それは真理に対する愛と、義務に対する正しい感覚を目覚めさせ、その人生の偉大な目的と終わりについて魂の目を開かせることである。それは自己のために善を愛するよう教えることではなく、心にそう感じるがゆえに良き行ないをするよう、また恐れからではなく、その完全な人格を喜ぶゆえに至高の神を愛し、仕えるよう教えることなのである。」(インストラクター、1961年8月P. 253)

非常に変遷の多い世の中に直面して、真理を教え我々の持つ文化の中で、洗練されたすばらしい魂を高揚させてくれるものを伝えるのは我々の義務である。これを果たすには、我々は学び続けねばならない。

続けて学べ

1度も良い機会に恵まれなかったと言いはっていた、ある紡ぎ女の次の話は、自分の関心をどこに見

出し、どのように適切な情報を集めたら良いかを説明してくれる。この女性は、ロンドンでの講演を終えた著名な博物学者、ルイ・アガシ⁵博士に、自分の不遇を訴えた。博士は、この女性の不平に答えて言った。「1度も良い機会に恵まれなかったのですか。今、何をしていますのですか。」

「私は独身で、兄のやっている下宿屋を手伝っています。」

彼はまた「そこで何をしていますか」と尋ねた。

「じやがいもの皮をむいたり、玉ねぎを切ったりしています。」

そこで彼は尋ねた。「それは地味な仕事ですが結構おもしろいでしょう。さて、あなたはその仕事を何にすわってやっていますか」

「台所のところの階段の一番下にすわってやっています。」

「どこに足を置いていますか。」

「化粧レンガの上です。」

「化粧レンガって何んですか。」

「さあ、わかりません。」

彼は「どの位、そこへかけているのですか」と尋ねた。

彼女は「15年です」と答えた。

アガシ博士は「ここに私の名刺があります。その化粧レンガの性質について、手紙を書いて送ってくれないですか」と言った。

彼女はその言葉をまじめに受け取り、家へ帰ってから辞書を調べた。彼女はレンガが粘土を焼いたものであることに気づいた。この定義は、アガシ博士に出す返事にしては余りに簡単すぎるように思われたので、皿洗いが終わったあと図書館へ行って百科辞典を調べた。百科辞典には、化粧レンガとは、カオリン(高陵土)と含水アルミニウム硫酸塩を陶化したものであるとしてあった。彼女はその意味がわからなかったが、興味をおぼえ調べてみようと思った。彼女は陶化という言葉を取りあげて、それについて捜し出せるものを全部読んだ。次に博物館を訪れた彼女は、地下室の生活から脱け出して、「陶化」という言葉の翼に乗って新しい世界へと飛び立った。「含水の」という言葉から始まって、地質学

を勉強し、その研究は、神がこの世を創造され、土壌をすえられた時代にまでさかのぼった。ある日の午後のこと、彼女はレンガの仕事場へ行き、そこで120種類以上のレンガやタイルの歴史を発見し、なぜそんなに多くの種類があるのかもわかった。そこで彼女は机に向かい、化粧レンガとタイルを題材に36ページ書き上げた。

アガシ博士からそれに対し返事が寄せられた。この主題で書かれたものでは、私の知るかぎり、最良の記事です。もし星印をつける3つの言葉を変えられれば、私はこれを出版してお金をあげましょう。間もなく、250ドルを受けとるよう手紙が来て、その手紙の末尾に次のような質問が鉛筆書きしてあった。「レンガの下には何がいますか。」時間の貴さを知った彼女は、一言「蟻」と返事を出した。博士は「蟻について話して下さい」と書いてきた。

彼女は蟻の研究を始めた。蟻は1,800から2,500種類あるのがわかった。1本のピンの上に、3匹を、頭をつきあわせておいても、まだもう一匹が立つ事ができる余裕がある位小さな蟻、2.5センチメートルもあって、1.6キロメートルにも広がって、ピッシリと軍隊のように列をなして進み、前に横たわるものはなんでもけちらしてしまう蟻、また目に見えないほど小さい蟻、屋に翼がはえたと思うと死んでしまう蟻、女の人の銀の指ぬきでおおってしまえるほど小さい蟻づかをこしらえる蟻、牛に乳を出させ、新鮮な牛乳を近くの貴族蟻の部屋へ運ぶ百姓蟻などのいることがわかった。

広範囲にわたって本を調べ、詳細にわたる研究のあと、この紡ぎ女はアガシ博士あてに蟻を主題にした論文を360ページも書き上げた。博士はそれを本として出版し、彼女にお金を送ってきた。彼女は仕事で得たお金で、今まで夢見ていた土地をくまなく訪ね歩いたのである。

さて皆さんはこの話を聞いて、我々だれでも下に蟻のいる陶化したカオリンと含水アルミニウム硅酸塩のかたまりの上に足をおいて腰かけているということ強く感じないだろうか。チェスタートン⁶卿はこう答えている。「世の中に興味のないものはなく、ただ興味を持たない人がいるだけである」と。

学び続けようではないか。

なぜ学び続けるのか。その答えは、教育の哲学がそれを求め、人生と永遠に関する哲学がそれを求めるからである。

我々の教育に対する哲学はどのようなものか。私

は自分が理解しているままに聖典からまとめてみた。それは、「神が命じられたこと」という言葉が始まって、「真理は正しい考えと良き行いに己を現わす」という言葉で終わっている。

なぜ学ぶのか。なぜなら、世界は移り変わり、我々は時勢に遅れないようにする必要があるのである。私のいう世界とは、有益で生産的知識を生み出す世界である。1600年代から1900年代にかけての過去3世紀間においては、科学とは技術の応用により人の生活のあり方、仕事のあり方が、それ以前の6,000年よりもはるかに大きな変化を生み出した。これからの30ないし35年間は、人の生き方、行動を今までの歴史以上に大きく変えるであろう。現在は1900年代に可能であったことより百倍もの知識がある。2000年代までには、記録し、鑑別し、蓄積し、探求し、教え、そして識別力をもって効果的に使用するあらゆる知識が現在の千倍も越えるようになる。最近、科学技術に関する定期刊行物だけでも、世界36カ国で約75,000種も発行された。それには、毎年約200万に及ぶ記事が掲載され、科学技術に関し、約3,000項目に要約して分類されている。これは皆さんにアイデアを提供してくれるであろう。

ジョセフ・F・スミス大管長は言っている。「福音の真理を装っていつわりの教義を末日聖徒の間で説く人は、2種類の人々から出ており、実際にはこれ以外から出ていない。それは、

第1は絶対的に無知な人。自らの怠惰のために英知に欠け、読書や勉強によって自己を進歩させるためにほとんど努力しない人、大病をわずらい不治の病いすなわち怠惰に陥った人である。

第2は、自分のうぬぼれた考えに照らして読み、自分の考えた法則で解釈し、自らが律法になろうとし、自分こそが自分の行為を裁く唯一の人というふりをした誇り高い人である。こういう人は第1の人以上に危険な無知な人である。

怠惰な者と誇り高ぶった者に気をつけなさい。彼らの影響は伝染する。清く、影響を受けていない者が守られるように、警告の検疫旗を彼らにかざした方が、彼らにとってもすべての人にとっても良い。(「福音の教義2」P.116)

ジェファーソン⁷は言っている。「人とは無知で自由な者だと信じている人は、決してそうではないと悟るようになる」なぜ学ぶのか。それは明らかにいくつかの良い理由があるからである。

どのように学ぶか。私は、生活から学んだ5つの言葉をあげたい。幸いなことに、私の経験から学んだそのことが、古い祈りに関する英語の本の口絵に印刷してあった。この5つの言葉は学習のための段階と呼ばれている。(1)読むこと、(2)聞くこと、(3)記録すること。私にとって記録するということは、コピーする、クリップでとめる、集めるといったこともさす。すぐに行なおうではないか。明日になると読んだ箇所がおぼろげになり、すっかり忘れてしまうかもしれない。子供がひきちぎるかポスターカラーで塗りつぶしてしまうかもしれない。記録しようと思っている本がどこかへいってしまうか、忘れてしまうかもしれない。記録するとは、記録しようと考えている最中にすることである。(4)組織化する。(考えて、物事を1つにする。結合し、首尾一貫したものにす。変更はあとからでもできるので、とにかく組み立てることである。) (5)消化する(私が理解しているのでは、この言葉は血流に力を与え、かすを吐き出し、エネルギーを得て働くことを意味している。)

何を学ぶのか。我々が続けて増し加えなければならぬ知識の4つの分野をあげる。

第1に、世事についての知識——いわゆる、世の中の出来事に対する知識である。つまり、教義と聖約63, 88, 90, 章で歴史、国外のこと、外国語、その他について聖句で語られていることである。他の無益で非建設的なことをするかわりに、むしろ世事を学ぶのが良いのではなからうか。

第2は、人間関係である。我々は、自己の福祉に関心を持つだけでなく、他人や社会にも全体として関心を払わねばならない。アルバート・シュバイツァー⁸は伝記の中で次のような興味ある例を話している。

「未開人は、他人と団結するのに非常に制約がある。まず自分と血縁の者、次に、自分の代表となってくれる大きな家族のような種族に限られる。私の病院にはそのような未開人がいる。歩行できる患者に、病床に横たわっていただければならない患者のために小さな仕事をしてくれるようもし頼んだとすると、その寝たきりの患者が同じ種族の者である時に限って働いてくれる。もしそうでない場合は、無邪気で大きな目をして——「私の兄弟じゃないよ」と答えてくる。どんな報酬もおどしも全く効き目がない。しかし、人間は自己を反省し、他人との関係を考えるようになるや、違った種族の者も自分と同じ

であり、隣人なのだ気づき始める。漸進的な進歩の過程で、人間は自己の責任の輪が広がってゆくのを感じ、ついには、関係するすべての人に及ぶのである。」

我々はただ生まれて生きていただけでは、自国に生まれ育って、自国のあらゆることを知るほどに、あるいは、福音のある中に生まれ育って、福音を知るほどには、人間関係のすべてはわからない。われわれが教師であるという事実だけで、人間関係にあって専門家にはなれない。

あるりっぱな知人が、2人の子供を連れて外出した。彼らは楽しい時間を過ごし、いろんな物を食べすべてのことが楽しく思われた。帰る途中で、小さい方の子は寝ついてしまった。父親はその子を車の後席に寝かせ、自分のコートを上からかけてやった。車を運転しながら、子供たちにとってすばらしい教師である父親は、その日の経験を子供がいつまでもおぼえておくように、年上の子供にこう尋ねた。「何が一番良かったかね。ええと——」そして父親は、その日の出来事を1つ1つあげた。その子は父親が尋ねるすべてのことに、ただ忠実に、「うん」と答えるだけであった。

そして最後にこう言った。「お父さんもし僕も寝たらお父さんのコートをかけてくれる？」この会話のすべてがすなわち学習であった。わずかの時間をさいて、人を知ることである。聞くこと——時折り口をはさんでも良いが一聞くことである。

第3の知識は、福音の律法とその歴史、すなわち生命の救いと主要な真理を知ることである。我々は、「詩と音楽の予言者」の語る言葉を学び、偉大な科学者が習得した事柄を学ぶ時、さらに至高のものを治める知識の分野があるのである。なぜなら、神と神の主要な創造物である人類とに関する知識は他のあらゆるものの中心となるからである。それがまた福音のすべてである。我々はこの知識を教える必要があり、かつこの知識を学ぶ必然性を教える必要がある。

ジョン・A・ウィットソー⁹長老は次のように書いている。「私は、他の科学と同様に、福音を注意深く学んだ。教会の書物を手に入れ、毎日余暇をさいて読んだ。福音に対する知識は増した。私は学んだことを毎日の生活で実行したが、決して不十分であるとは思わなかった。」さらに彼は、自分の探求がどのように詳細なものであったかを語っている。ウィットソー長老は科学の品位を落とさず、むしろ、

福音がさらに大切なものであると考えた。

我々が学び、成長し続ける必要のある第4の分野は、若人が強く靈感を受け、励まされて、真理の偉大な原則を、適用できるよう助けてやる力を養うことである。

英国で伝道している折、私は早晩、どの地方部の宣教師にも独自の仕事を与えねばと思った。宣教師たちは、励ましや靈感、指導や勧告、あるいは面接を受けに伝道本部へやって来た。我々は集会を持ったが、集会の間に、改宗率が減少してきた話になると、私は時々次のように言った。「じゃ、兄弟、10時10分をまわっています。組になって街頭へでかけなさい。違う同僚と出かけて行って働きなさい。街角にある博物館へ行ってもいいし、家の前に立っていてもいいし、あるいは通りをずっと歩いて行ってもいいです。しかし、今から30分後に、聖書から説明できるよう、人生について何か学んで戻りなさい。」このことは私の生涯で最も素晴らしい経験の1つとなった。私は、この生き生きした目をもち、機敏な素晴らしい若者たちから学んだすべてを皆様にお伝えすることはできない。

伝道本部で私は、道の向こう側に建設中の建物を見、絶えずジャックハンマーのうなりを聞いていた。それは新しい大学の建物らしかったが窓から眺めるたびに驚かされた。騒音は数年も続き、私は多くの人にこう語ったのである。「英国の建物が100年ももつのはちっとも不思議ではありませんね。建てるのにこんなに時間がかかるのですから。」この工事はそれからもずっと進められた。ところである日のこと、私は、街角にある非常に有名な由緒ある赤レンガ造りの建物が取りこわされるのを目にした。この建物は、かつて、非常に著名な科学者たちが、ある偉大な発見をするのに常時使用していたもので、その、1つ1つレンガが解体されていたのである。

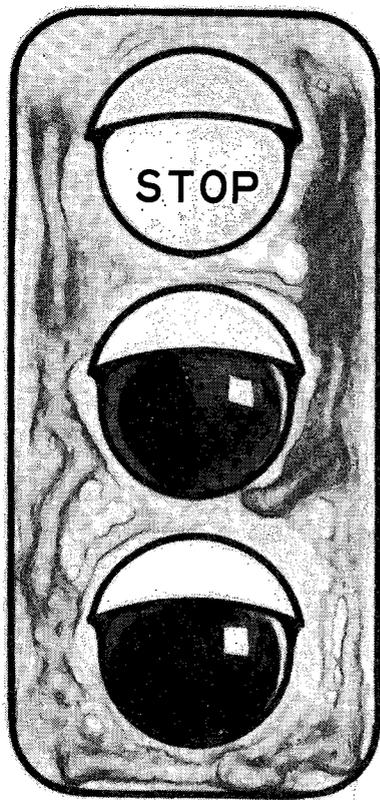
私が不平を言うのを聞いた1人の若い宣教師がある日やって来た。彼は学んだことを応用したのである。目を見張って言った。「ハンクス伝道部長、最近ハイパーク教会堂の上に上がって道の向こう側をご覧になりましたか。」私はいやと答えた。彼は、「行ってごらんください」と言った。そしてその宣教師は、皆が良く知っている、外側は白く塗って内側は不潔な、あの偽善な律法学者の教訓を引用した。「私は、私たちが建物の正面をながめる時に、判断を誤ってしまうことがあるものだということを主が

教えておかれるように思うのです。部長がそこへ行かれてみれば、私の言うことがおわかりになるでしょう。建てるのに非常に手間がかかっていると部長が考えておられるあの小さな建物の陰は、全体がブロック造りなのです。建物の外装で隠されているのです。」

最近私が学んだとても素晴らしいことの1つをお話したいと思う。フレホフという人が次のように書いている。「数年前までむしろ私は才気ある人を好んだ。考えていることをいちはやく言葉に表わしさまざまなアイデアを新しい方法で表現する人を見るのは喜ばしいものであった。しかし現在、私の好みが変わったことを悟った。言葉の花火はしばしば私をうんざりさせる。それは、自己主張や自己表現から出てくると思われるからである。今や私は、別のたぐいの人、つまり他人のことを考え理解しようとする人、他人の自尊心を傷つけないよう注意する人をむしろ好む。今日私が好む人は、常に他人の必要とするものに気づき、他人の苦しみや、恐れ、不幸、自尊心を求める気持ちに気づく人なのである。私はかつて才気ある人を好んだが、今私は善良な人を好むのである。」

福音を教え、忍耐強くあり、学び続けよ。家庭であれ、教室であれ、この福音を教えるという仕事はこの地上にあって最も重大な仕事である。これは神のみわざであり、我々がもし努力するなら神は助けくださるのである。

1. ラルフ・ウルドロー・エマソン (1803—1882) アメリカの随筆家、詩人。
2. マルクス・チュリウス・キケロ (B. C. 106—43) ローマの政治家、演説家。
3. デモステネス (B. C. 384?—322) ギリシャの演説家、政治指導者。
4. ジョン・ラスキン (1819—1900) 英国の著述家、評論家、社会学者、博愛主義者。
5. ジョン・ルイ (ロドルフ) ・アガシ (1807—1873) スイス生まれのアメリカ人で、博物学者、作家、教育者。
6. ギルバート・ケイス・チェスタートン (1874—1936) 英国のジャーナリスト、小説家、詩人、批評家。
7. トーマス・ジェファーソン (1743—1826) アメリカの第3代大統領 (1801—1809)
8. アルバート・シュバイツァー (1875—1965) フランスの哲学者、音楽家、ノーベル平和賞受賞 (1952)
9. ジョン・A・ウィットフォード (1872—1952) ノルウェー生まれ、1921年使徒に聖任さる。



高価なるもの—無知

七十人最高評議員会会員

ハートマン・レクター・Jr.

数年前私が軍隊にあって家を離れている間に、家の近所で、良く働くある農夫が死んだ。私は家へ帰ったおり、いとこと、その死んだ農夫の財産について話し合い、だれもが言うようにこう尋ねた。「どの位残していったかね。」するといとは「全部残していったよ。あの世へはちっとも持っていかなかった」と答えた。

このことは、ほんとうにわずかの人しか悟り得ない偉大な真理として私の心を打ったのである。確かに我々多くの者は、この世を去る時に、あたかもすべてのものを携えてゆけるものと思っただけである。しかしもちろんそうではないのである。我々は、物質的なものはすべてこの世へ残してゆくのである。パウロがテモテへあてた手紙の中で「わたしたちは、何ひとつ持たないでこの世にきた。また、何ひとつ持たないでこの世を去ってゆく。」と断言している。(Iテモテ6:8)

さて、我々がこの世を去る時、一緒

に携えてゆける何か良い物はないのだろうか。予言者ジョセフ・スミスは、この世で得た知識と英知は、この世を去る時に携えてゆけるものであると教えている。

「さればもしある人ありて、精励従順によりこの世に於て他の人よりも一層勝れたる知識と英智とを得ば、未来の世に於てそれだけ利を得べし。

そもそも創世の以前より天に於て定められたる一つの変らざる律法ありて、あらゆる祝福はこれに基くなり。

すなわち、われら何にても神より祝福を受くる時は、この祝福の基く律法に従うによりて然るなり。」(教義と聖約130:19-21)

このことが真実であるとする、目標の選択にあたって、光と真理、または英知の追求を最上位におかねばならないように思われる。なぜなら、我々は、それらのものを永遠に所有できるからである。我々は、知力を追い求めねばならない。「神の栄光は英知な

り」(教義と聖約93:36)であるから、もし我々が天父のようにありたいと望むなら、我々のとるべき道は決まるのである。

無知は高くつく。事実、我々が知っているもので最も不経済な商品である。確かに、無知から多くの誤りを犯す。もし、受けたことのない神の律法を破り、知らないでいるとすれば、主は我々を罪の中にはおきたまわらない。

「……人が、なすべき善を知りながら行なわなければ、それは彼にとって罪である」(ヤコブ4:17) またパウロの言葉には、「…律法のないところには違反なるものはない」(ローマ4:15)とある。しかし、たとえ無知なるがゆえに罪に定められることがなくとも、その律法に従順精励でなければ、律法に従順であることに基づく祝福を受けることはできないのである。つまり、我々は、自らの無知により祝福を拒んだことになるわけである。もし知らないために交通規則を破ったとして

「のちの世に携えることのできるものは愛のみである」

も、課せられる罰金は、知っていて破った者とまったく同額のものである。また、もし電気のソケットに指を突っこんだとしたら、電気に関する知識のあるなしにかかわりなく、同じようにショックをうける。特に、主のみ言葉により、その真実性を理解することができる。「人は無知にして救われること不可能なり。」(教義と聖約131:6) 人は主を知らないかぎり真に啓発されないということは真実である。

学び、光を受けるのをなぜ躊躇しているのだろうか。主が語られるのが遅いからであろうか、あるいは、わずらわされたくないからであろうか。ヤコブの言葉によればそうではない。「とがめもせず惜しみなくすべての人に与える神……」とある。(ヤコブ1:5)

結局、問題は我々が光を受けようとしないところにある。「……而して、ここに人の罪を受くる所以あり。」主は言われる「なんとなれば最初より在りしところのものは人々に明白なり。然るに、人はその光明を受け入れざればなり。

すべて、光明を受け入れざる霊を有つ人々は罪を受く。」(教義と聖約93:31-32)

しかし、どうして我々は光を受け入れないのであるか。主は聖典の中でいくたびとなくその理由を示しておられる。端的に言って、我々が学ぼうとしない理由は、学ぼうという良い状態にないからである。光を受け入れる状態にないのは、喜んでそれを受けようとしなからである。率直に言って、

人々はただそれを望んでいないのである。さて、私は、多くの人がこの言明に激しく反対するであろうと思う。もちろん我々は天父なる神からの光と教えを求めている。それでもなお、主のみ言葉は真実である。死者の中からよみがえるが、栄光を受けることのない人々について主は言われる。

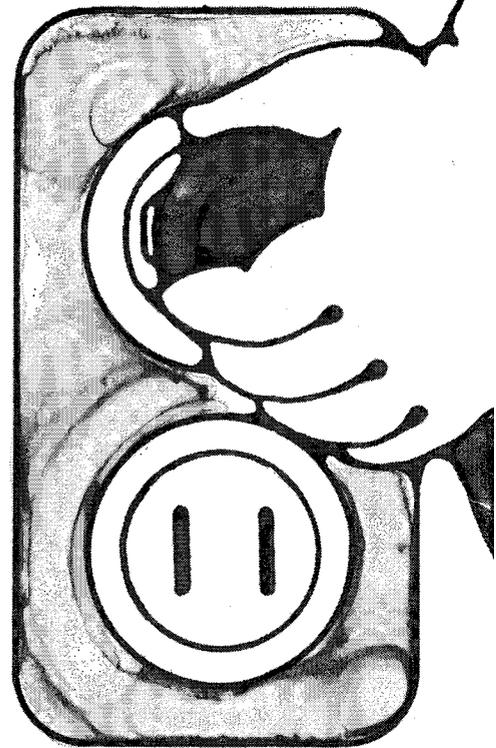
「而して、残れる者たちもまた生くべしといえども、彼らはまた再び自らの場所に帰り、その受くべかりしものを進んで受けざりしにより自ら選んで受くるところのものを受くべし。

およそ、人贈物を与えらるるにこれを受けずば何の益あらんや。見よ、彼は贈られたるものを喜ばず、また贈りし人をも喜ばざるなり。」(教義と聖約88章32-33節)

次に、シェイクスピアのジュリアス・シーザーの中で、カシアス¹がブルータスに言っている言葉は、等しく我々にも適用される。「親愛なるブルータス²。あやまちは我々の運勢にあるのではなく、我々自身の中にあり、我々は、その手下になっているのだよ。」我々は、無知であるがゆえに自分自身をみつめねばならない。

我々は、主が我々をお待ちになる、すなわち我々が、必死に追い求めている光明を主からただけのような状態に自らをおくまで主が待ちたもうた時、逆に光明と真理とをお授けになるのを我々が待っていると思いがちである。

主は我々の有様をよく語っておられる。「そのさばきというのは、光がこの世にきたのに、人々はそのおこないが悪いために、光よりもやみの方を愛したことである。」(ヨハネ3:19) 繰

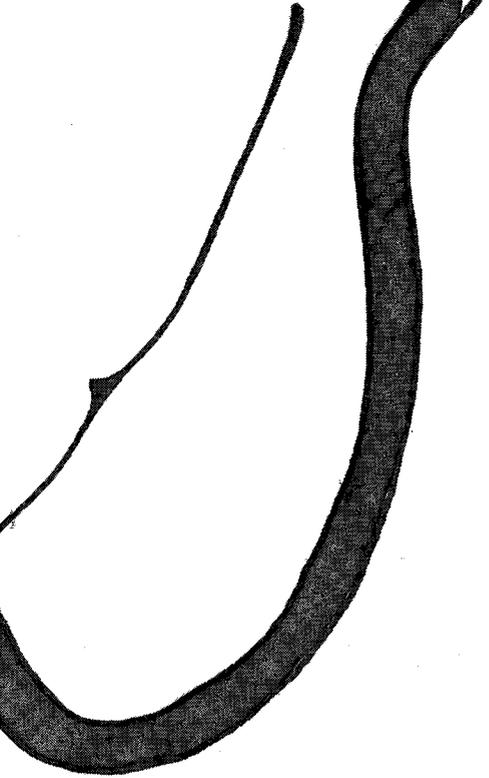


り返して言おう。「人々はそのおこないが悪いがために」なのである。

啓示、光明、または知識は聖霊の力によりもたらされる。主のみ言葉は、「ヨハネによる福音書」の中に記されているとおり意味深いものである。

「しかし、助け主、すなわち、父がわたしの名によってつかわされる聖霊はあなたがたにすべてのことを教え、またわたしが話しておいたことを、ことごとく思い起させるであろう。」(ヨハネ14:26) また再び「……聖霊はあなたがたをあらゆる真理に導いてくれるであろう……きたるべき事をあなたがたに知らせるであろう。」(ヨハネ16:13参照) 事実我々は聖霊なくして福音の真理を教えることも、学ぶこともできない。今日、主はこの偉大な真理を次のように確認しておられる。

「この故に真理の『みたま』によりて言を受けたる者は、また真理の『みたま』によりて教えらるるままにこれを受くることを汝ら知りて覚り得ざる



ば皆与えられん。」(教義と聖約50：21—24, 27—29)

モルモン経中の偉大な予言者アルマは、きよきみたまの力をうけて従順について偉大な説教をした後、そのような知識と力をどのようにして受けたかを語っている。「これは神の聖い『みたま』が私に示したもうたのである。私は自分がこれを知るために長い間断食をして祈った。そこで主なる神がその聖い『みたま』によってこれを私に示したもうたので、私は自分でこれが真理であることを知っている。この聖い『みたま』とはすなわち私の中にある啓示の『みたま』である。」(アルマ5：46)

は何ぞ。

この故に、教ゆる者も受くる者も互いに相悟り、両者共に徳に導かれて共に悦ぶなり。

人を徳に導かざるものは、神によらず暗黒なり。

神によるものは光明なり。その光明を受けて神に従うこといよいよ久しき者は、その受くる光明いよいよ明らかなり。その光明いよいよ明らかとなりてついには完き屋となるべし。」

「この故に、この者はすべてのものの所有者なり。それ天に於ても地に於ても、御父の御旨によりてその子イエス・キリストを通じて遣わさるる生命も光明も、『みたま』も能力も、すべてのもの彼の支配となればなり。

されど、人は潔くせられてすべての罪より潔めらるるにあらざれば、すべてのものの所有者にあらず。

汝らもしすべての罪を洗われて潔くせらるるならば、イエスの名によりて何事にまれ欲するところを願え、さら

ある会員は、問題が生じた時、断食と祈りが解決に必要なすべてであると感じているように思われる。数年前ある若い女性が私の事務所にやって来た。彼女は、ある若い男性が自分と結婚してくれるかどうか知りたいと思って2日間断食して祈ったところ、望みどおり自分と結婚してくれるという答えを受けたと感じた。ところがそれから間もなくして、その若い男性は別の女性と婚約してしまった。そこで彼女は私の事務所へやってきたのである。彼女は私に「これはどうしたことでしょう。私は、彼が結婚してくれるという答えを受けたはずなのに」と質問してきた。

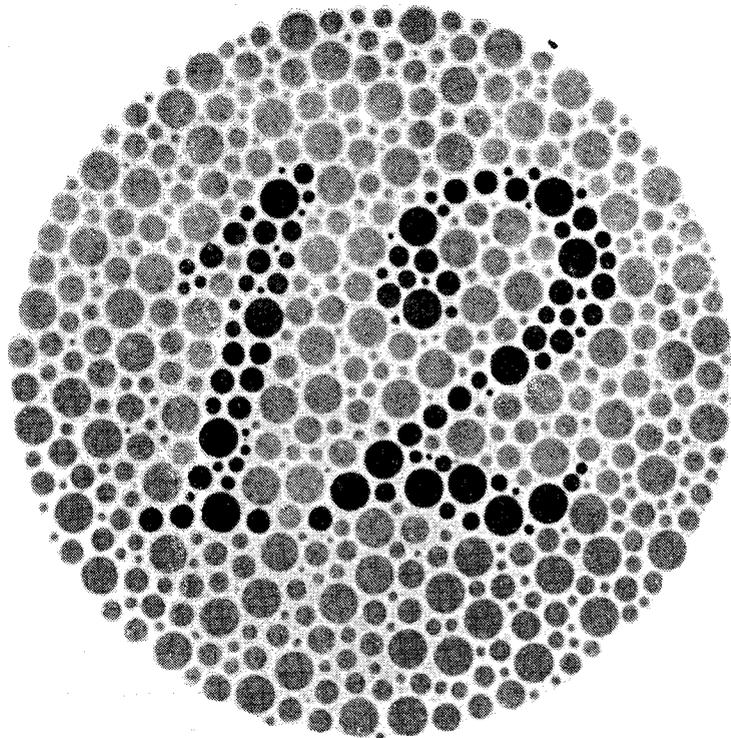
さらに面接を続けると、彼女ははっきりと知っていながら多くの戒めを守っていないことが明らかになった。断食と祈り以上に大切なことがあるのである。我々は再出発しなければなら

い。悔い改め、すなわち、罪を認めて捨て去らなければならない。聖典を研究し、聖典より捜し求めなければならない。神の戒めを守り、それも正しく守らなければならない。なぜなら戒めを守ることににより、我々の状態は良くなり、天父よりの交わりである光明と真理を受けることができるようになるからである。またこの光明と真理は、我々にとってかけがえのないものであって、この世を去る時に携えてゆくことのできるただ1つのものだからである。

兄弟姉妹の皆さん、皆さんがこの大会で耳にしておられることが、主の精神、主のみこころであり、特にこの危急の時代にあつて聖徒らの救いのための主のみ言葉であることを証し申し上げる。なぜなら今日でも主は生きたまい、しもべに語りたもうからである。我々は主のみ言葉に心を傾けねばならない。戒めを守り、主のみ言葉に心をとめ、主の前に恐れおののいて(ピリピ2：12)救いを達成することがきわめて大切である。そうできるよう、また、世を去る時に「彼は、清い、自由な、啓発された幸いな心を携えていった。仲間に対し、良心のとがめなくこの世を去った」と言われるようにしようではないか。皆さんがこのような幸福を享受できるようイエス・キリストのみ名により祈りたてまつる。アーメン。

1. ゲイアス・カシアス (B. C. 42死す) ローマの将軍、陰謀人。
2. ユニアス・マーカス・ブルタース (85?—B. C. 42) ローマの政治および軍事指導者。

見分ける力



十二使徒評議員会補助

ウィリアム・H・ベネット

第2次世界大戦の従軍中に、私は石原式色盲検査を受けるように命じられた。それは色、図案および数字を用いたいろいろな種類の色盲の診断をするための検査である。この検査では、ある種の色盲の人々は容易に同じ色調の色を区別することができる。しかし、色の混交する陰の部分の問題である。色盲の人は正しい識別ができない。いくら努力しても、彼らは正常な人にはわかる色の相異が区別できないのである。

この石原式色盲検査で、私はある大切な事柄を学んだ。それは我々の生活に広く適用されるものである。

自分は真理を求めており、真理に関する強い証を得ようと努めていると公言しながら、進んで主のみ前にへりくだらず、信じていることを実践せず、また福音に従って生活しようとしなない教会員がいる。今述べた色盲の状態とこのような教会員の状態との間に類似点はないであろうか。これらの事柄を実践しない人は、怠惰の罪によりすべての真理の偉大なる源である天の御父に対して門戸を閉じているのである。その結果、彼は誤ってものを見ることになる。

生涯の旅をなす間に、我々一人一人は日陰や夕暮れに出会い、また真暗な道を歩むことさえある。その時に、我々はより大きな力で助けられない限り、

はっきり見きわめ、正しく解釈し、賢明な結論に達することはできない。これら陰の部分の幾分か物質界に見出され、あるものは知識の世界に、またあるものは霊の王国に見出される。ここで主にかかわるすべての事柄は霊にかかわるものであると主が言われたことを心に留めよう。

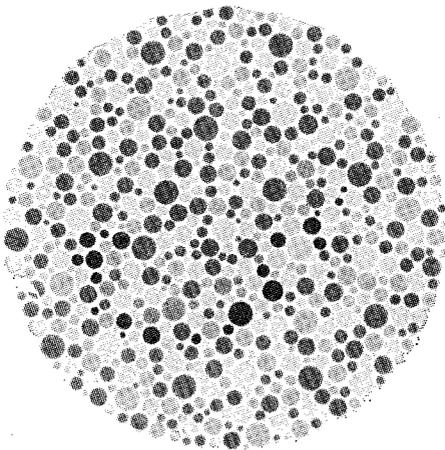
「この故に、われ誠に汝らに告ぐ。われにかかわるすべては霊のことなり。われは何時たりとも、いまだ嘗て俗世の事にかかわる律法を与えたることなし。如何なる人にも、人の子らにも、わが造りし汝らの先祖アダムにも与えたることなし。見よ、われはアダムに自ら自由意志を行うことを許したり。われは彼に誠命を与えしが、俗世にかかわる誠命を与えたることなし。わが誠命は霊に関わるものなればなり。わが誠命は肉体のものにも俗世のものにもあらず、また肉欲のものにも情欲のものにもあらず」
(教義と聖約29：34-35)

我々一人一人には、現在あるがままの事柄を理解する時にある限界がある。我々ははるかかなたを見ることができる。そこでは、天と地が1つになっている。しかし我々はその先を見ることができないがそこには何かがある。これを知るために物質界で我々がなすべきことは、ビルや山に登ったり、あるいは飛行機に乗ったりしてかなたを見られるようにす

ることである。

我々は物質的分野のみならず知的、霊的な分野においても生活全般をより良いものに改善する必要がある。これを行なおうとする時には、いかなる場合にも数々の事実があり、数々の見解があることを心に留めておかなければならない。また、困難には原因があり、それから起こるきざしもある。事実と原因をつかみ、またそれらの関係をはっきり理解する時に、我々は正しく解釈し、賢明な結論に達するのに良い立場にいると言える。しかし、我々が数々の見解ときざしを無視して暮らす時には、困難な問題を持ち続け、永遠の満たされた解決を見出す時間を持たずにいるのである。

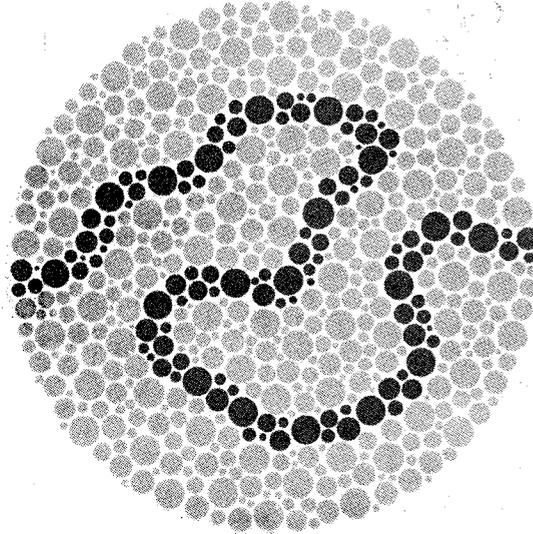
また我々が心に留めなければならない大切なこと



がある。それは、我々がいくら知的であっても、いくら一生懸命に働いても、我々の教師がいくら良くても、学習のためのその他の状況がいくら好ましくとも、我々は地上の限られた期間ではすべての知識のうちのほんの少しの部分しか習得できない。我々が習得するのは通常ほんの狭い専門的な分野に関するものだけである。そのように、我々には限界がある。我々が考える事柄はしばしば非常に分節的なものであり、そのために誤って判断を下すことがある。そこで、次のソロモンの勧告に進んで心を留めるべきではないだろうか。

「心をつくして主に信頼せよ、自分の知識にたよってはならない。すべての道で主を認めよ、そうすれば、主はあなたの道をまっすぐにされる。」(箴言 3：5-6)

神の導きがなければ、我々は人生の日陰で困難を味わうであろう。我々は一人で歩くには及ばないのである。天の御父とその御子イエス・キリストとあらゆる時代の予言者たちが、この生涯の旅の進むべき道を我々に示してこられた。我々は喜びと幸福を



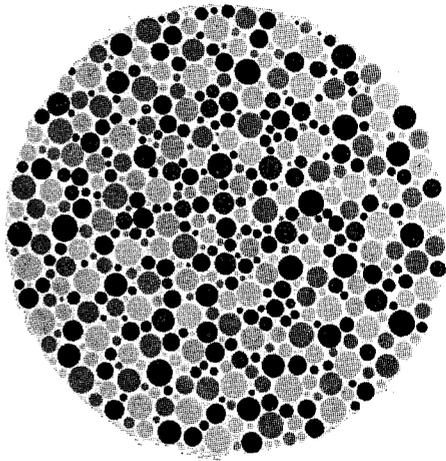
見出し、もし道標に気を付け、与えられた指示に従うならば、それだけで無事に目的地に着くことができるのである。

これらの道標と指示は何であろうか。それらは聖典と現代の予言者たちの靈感された言葉に記されている。その幾つかをあげよう。主ご自身が語られ、ヨハネが記録したみ言葉を福音書の第7章16、17節から初めに引用したい。

「そこでイエスは彼らに答えて言われた、『わたしの教はわたし自身の教ではなく、わたしをつかわされたかたの教である。神のみこころを行おうと思う者であれば、だれでも、わたしの語っているこの教が神からのものか、それとも、わたし自身から出たものか、わかるであろう。』」

ローマ人へのパウロの手紙の第1章16、17節を読もう。

「わたしは福音を恥としない。それは、ユダヤ人をはじめ、ギリシャ人にも、すべて信じる者に救を得させる神の力である。神の義は、その福音の中に啓示され、信仰に始まり信仰に至らせる。これは、『信仰による義人は生きる』と書いてあるとおりである。」



コリント人への第二の手紙、第5章7節には「わたしたちは、見えるものによらないで、信仰によって歩いているのである」と書かれている。

モルモン経のアルマ書第26章22節は、アンモンの語った言葉である。「悔い改めて信仰をあらわし、善いことを行ってたえず祈る者は、神の奥義を悟る能力を授かり、まだ示されていないことを明らかに示す権能を与えられ……」

教義と聖約第88章63節にはこのように記されている。「われに近づけ、さらばわれ汝らに近づかん。熱心にわれを求めよ。さらば、汝らわれを見出さん。求めよ、さらば与えられ、叩けよ、さらば開かることを得ん。」

次に、第121章45、46節を読もう。

「すべての人に対して、また信仰ある家族に対して汝の腹中を慈愛にあふれしむべし。絶えず徳を以て汝の想を飾るべし。然る時は、汝の自ら信ずること神の前に強くなりて、神権の教理は天より下る露の如くに汝をうるおさん。聖霊は常に汝の伴侶となり、汝の笏は真理と正義の変ることなき笏となり、汝の支配は永遠の支配となりて強いらることなく永遠に汝に流れ込まん。」

聖霊の力によって我々は一切の事柄が真実かどうか知ることができると、モルモン経のモロナイ書第10章5節で主は我々に告げておられる。何とすばらしい約束であろうか。我々すべての教会員はこれを知ることができる。なぜなら、パテスマ後の確認で頭に手が按かれ、権能を有する人が我々に聖霊の

賜を授けたからである。もし我々が歩むべき道に従って生活するなら、聖霊が我々の生活にいかにか大きな力と恵みをもたらしたもうかを我々は経験できるのである。それによって視界が広められ、人生の日陰の中でも、事実あらゆる所において物事を一層はつきりと理解することができるように光が投げかけられるのである。

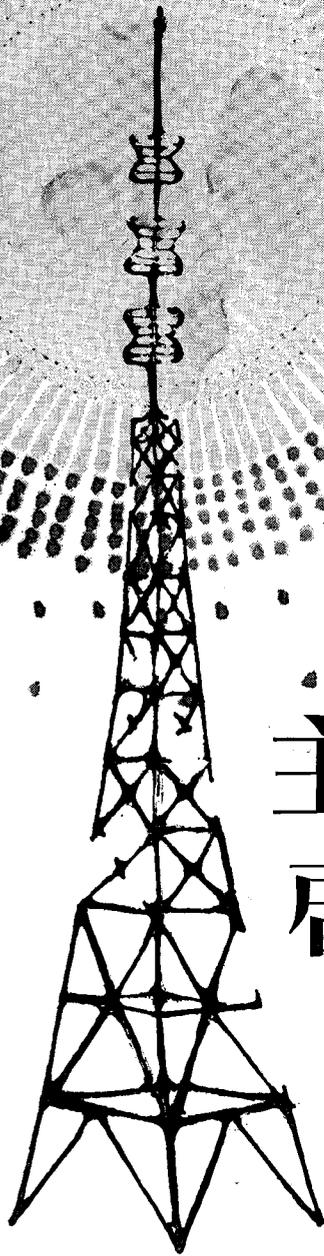
多くの人々は、自分自身を信ずるほどには聖典や現代の予言者たちの教えを信じなくなりつつあるように思われる。もし人々が不信に対して払う努力を信ずることに向け、謙遜になり、信じていることを実践し、勤勉に学ぶなら、聖霊は助けたもうであろうと、私は今まで心に思ってきた。そうすることにより、人々は今信じられないと思っている多くの事柄を信じるようになるであろう。

聖霊は、人は神の子であるという確信を我々に与えたもう。概して、聖霊の助けなしに神と人の関係を理解しようとする、肉眼のみを通して物事をながめ、この世的な状態のみを考慮しがちである。しかし、この世は初めではなく、また終りでもない。神に対する人の関係を理解するために、我々は聖霊の助けを得て視野を広め、前存の状態と死後の生活を思いめぐらさなければならない。

聖霊ははっきりしない点を一層明らかに理解させたもう。しかし、それが我々の生活にあって本来あるべき力となるために、我々は心に正しい事を行なわねばならない。我々は心からへりくだり、良き業に従って強い信仰を示し、いつも心から祈り、断食と祈りをなし、勤勉に福音を学ばなければならない。また、福音に従って生活し、教会で活発であり無私奉仕をなし、地上に神の王国を確立するために働かなければならない。

私はクラスで、戦場で、教会の責任で、また日常生活で聖霊の力を感じてきた。私が主のみ前にへりくだり、また信じていることを実践し、一生懸命に学び、福音に従って生活し、断食と祈りをなすことによって自らを備える時、ほとんど聖霊の力が与えられてきた。

私は神が生きたまひ、福音が真実であり、この教会はイエス・キリストの真の教会であり、神の真の予言者が今日我々を導いておられることを証する。イエス・キリストのみにより、アーメン。



主の民は 啓示を受ける

七十人最高評議員会会員
ブルース・R・マッコンキー

かつてオーストラリアの伝道部長であった頃のある日、タスマニアで伝道している宣教師に「あすウエリントン山に登り、頂上で宣教師大会を開こう。そこで、主との交わりを求め、主のみたまにあずかるうではないか」と語ったことがある。

山に登り、頂にいる間にテレビ放送局を訪れた。一人の若い快活な男性が私が今まで耳にしたこともない単語ととも理解できない原理を使って、テレビの音と画面がどのように谷間へ放送されるのかを説明してくれた。

その晩ホーバート市にもどった私と2人の息子はテレビの前にすわり、適

当にチャンネルをまわした。すると先ほど言葉で説明されたことが実際に画面を通して現われた。

さて、私はこのことが、啓示を受け示現を見ることについて完全に説明してくれると考える。我々は過去の記録から示現や啓示について読むことができ、当時完全な福音にあずかっていた人々の霊感に満ちた書物を研究することができる。しかし、我々自身が見聞きし経験するまでは、そこに含まれていることを理解することはできない。

今、このタバナクルには言葉や音楽があふれている。ヘンデルのメサイアが歌われ、世界の政治家たちが国民に

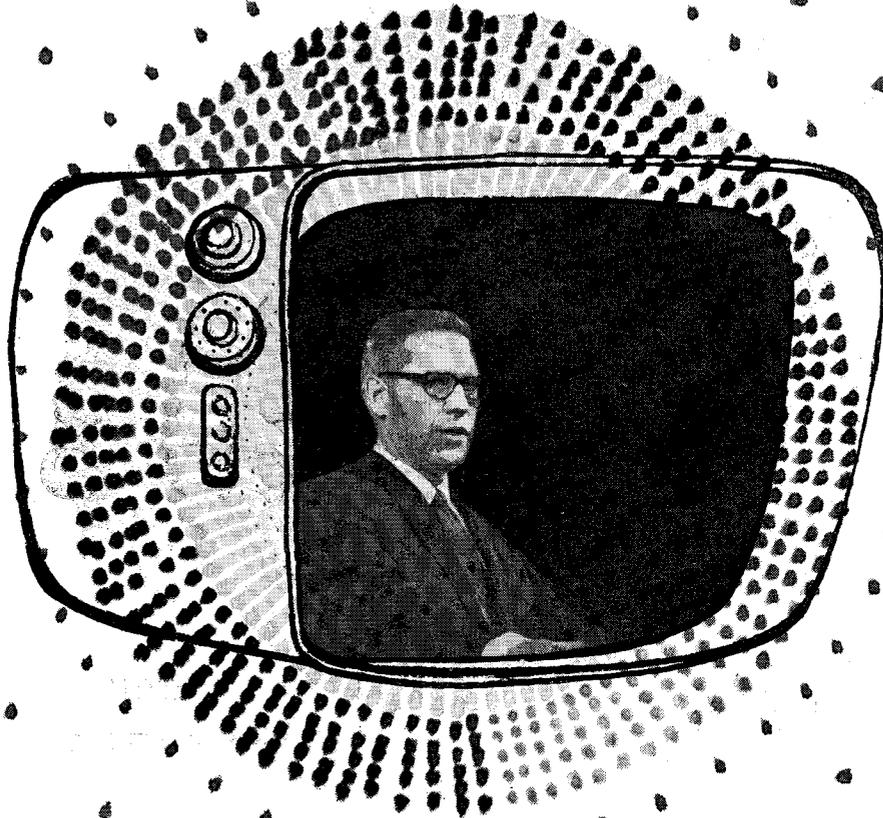
所信表明を行なっている。しかし我々は何も聞こえない。

このタバナクルにはベトナムやワシントンからの画面が充満している。人が月の表面を歩いている姿さえある。しかし我々はそれらのものを目にはしていない。けれども、ラジオを適切な同波数に合わせて、テレビを適切なチャンネルにまわすなら、まったく未知のまままで過ごしてしまうものを即座に見聞きし、経験するのである。

永遠なるものの啓示や示現もまたその通りである。啓示や示現は常に我々を取り巻いている。このタバナクルは聖典に記録されていることで、またそ

れ以上のことで満ち満ちている。我々の前には、栄光の各段階が放映されているが、聖霊の出したもう周波に心を合わせていないため、それを見聞きし経験していないのである。 ✓

を与え、教え、また立証するよう委任されている。そこで慰め主は、救いにつけるあらゆる真理、神に関するすべての知識と知恵を常に無限の空間に向けて放っておいでになる。 ✓



ジョセフ・スミスは言っている。「聖霊は啓示を与えるお方である」「人はだれも啓示を受けずに聖霊を受けることはできない」と。(「予言者ジョセフ・スミスの教え」P.328英文)
モロナイは言っている。「……聖霊の力によって一切の事の真実であるかどうかがあなたたちに解る。」(モロナイ10章5節)

慰め主は、すべてのことを知りたもう。慰め主は天父と御子を証し、啓示

どのようにこのことがなされているかを我々は知らない。神御自身について、あるいは神が宇宙を治められるその法則について我々は理解することができない。しかし、ここソルトレークの谷で、永遠の存在者に心を合わせる時、我々は神の事柄を見聞きし経験するので、確かに聖霊の働きがあることを知る。

ラジオやテレビを支配している法則はアダムの時から現在に至るまで存在

してきたが、ただ現代になって、人はこの不思議な物を見聞きし体験しているに過ぎない。また人が示現を見、神のみ声を聞き、みたまにあずかることのできる法則が常に存在してきた。しかし、魂の中に主の啓示を植えつける律法に従わないために、いたるところにいる数えきれない多くの人々が神の良き言葉を味わうことなしに生き、死んでいく。

そこで私は、真の宗教を得る唯一の道は、主からそれを受けることであると申し上げたい。真の宗教は啓示を受ける宗教であり、人の考えで造り出されるものではなく、神からもたらされるものである。

人は神を創造したのではないし、また自らを救うこともできない。だれも自ら復活したり、あるいは、自ら天の王国に住居を割り当てることはできない。神のみ言葉によれば、救いは神から来たものであり、救いを得るためになさねばならないことは、啓示によってのみ知ることができるのである。

神は絶えず我々に啓示を与えたもう。さもなければ神は永遠に未知の存在となる。また神につけることは、神のみたまによってしか、またみたまを通してしか知ることができない。

真の宗教は霊的事柄を扱う。知性、研究あるいは理性によっては神と神の律法につける知識に到達しない。私は普通の心の持ち主であり、普通の人よりも特にすぐれても劣ってもいない。知性の面では、私は大学の学位を持っている。その活動分野では、教育と知性が熱心に求められる。

しかし、霊的賜物と比較すると、それらのものは取るにたらない、つかの間のものにすぎない。永遠の観点から見れば、我々各自が必要とするところ

のものは、信仰と正義に基づく高い学位である。我々に永遠に寄与するものは、理性の力ではなく、啓示を受ける力である。研究により学び得た真理ではなく、信仰により得た知識である。この世に関する知識ではなく、神とその律法に関する知識なのである。

ジョセフ・スミスは、宗教を主題に書いたどんな本を読むよりも、人は5分間、天国をながめる方が一層神の事柄を学ぶことができると語った。宗教は体験されねばならないものである。

私は、宗教についてとめどなく語ることができるにもかかわらず、決して宗教的体験をしたことのない人を知っている。私は、宗教について多くの本を書いているにもかかわらず、行動のない霊性しか持ち合わせない人を知っている。彼らが福音の教義に興味をいだくのは、主がその中で何を考えられるのかを見出すためではなく、むしろ、自分自身の思索的な見解を守るためなのである。それらの人々の語ることや書くことは理性と知性の分野でのことである。神のみたまはその人々の心にふれられていない。それらの人々は再び生まれ変わり、聖霊によって新しく生かされる者になってはいない。啓示を受けていないのである。

この啓示を受け、みたまの賜を享福することは、全教会員の特権であり、権利である。

我々は教会の会員に確認される際、聖霊の賜を受ける。これは、信仰に基づいて、神会の一員であられる聖霊が絶えずともいてくださるという権利である。この賜を実際に享受できるか否かは、個人にかかっている。「神はその聖き『みたま』により、すなわち聖霊の言い尽し難き賜によりて、世の始めより今日に至るまで嘗て表したまいしことなき知識を汝らに与えたまわん。」(教義と聖約121:26)と聖徒らに対し啓示は述べている。

ニーファイは父親が受けた啓示について語っている。「父はまことに偉大なことを多く兄弟たちに語ったが、それは人が主に尋ねなければ解りにくいことであった……。」

同じ啓示についてレーマンとレミューエルは言った。「……父は話をしたが、その言葉は何のことだか解らない。」

ニーファイは尋ねた。「あなたがたは主に尋ねたのですか。」

彼らは答えた。「主に尋ねてはいない。主はこんなことをわれわれに知らせないからである。」

そこでニーファイは次のようなすばらしい言明をしている「あなたがたが主の言いつけを守らないのは何故であるか。あなたたちの心をかたくなにして亡びを招くのは何故であるか。

主がこれまでに仰せになったことを憶えていないのか。主は『もし汝らその心をかたくなにせず、答を受くと信じ、固き信仰を持ち、わが誠命を勤勉に守りてわれに願わば必ずこれらのことを汝らに示さるべし』と仰せになった。」(I ニーファイ15:3,7-11参照)

啓示を受けることは教会の会員の特権である。ジョセフ・スミスは言っている。「……神はジョセフに啓示なされたことを、十二使徒らにもお知らせになるであろうし、またいと小さい聖徒でさえも、受け入れることができるようになればすぐにでもすべてのことをお知らせになるであろう……」(「予言者ジョセフ・スミスの教え」英文)

また次のように言っている。「神のことについて語るのは、すべての長老の特権である。また我々は皆、完き信仰のうちに1つの心、1つの精神をいだいて共に集まり、今日と同様、次週も否いつともばりを開けてもらうことができるであろうか……」(「同上」P.9英文)

宗教は感じ、体験されねばならない。復活された主がニーファイ人之間で伝道された記録の中に次のような物

語が見られる。「イエスは地にひざまずいて御父に祈りたもうた。その祈りは書くことができないが群衆の中でこれを聞いた者たちは次のように証を立てた。

私たちが見たり聞いたりしたイエスの御父に対するお祈りは、人の目がまだ見ず、耳がまだ聞かないほど偉大で驚嘆すべきものである。

これを口で言いあらわせる者もなく、筆で書きあらわせる者もなく、また人間の心で想像できぬほど偉大で驚嘆すべきものである。イエスが、私たちのために御父に祈って居りたもうのを聞いたとき、私たちの心に満ちた喜びは人間の想像ができないものである。」(III ニーファイ17:15-17参照)

続いての祈りについて聖典は次のように言っている。「イエスの祈りの言葉は人の口で言い表せず、また人の筆で書き記せないものであった。

しかも群衆は実際にこれを聞きたその証をした。かれらはその心が開かれて光に照らされたから、イエスの祈りの言葉を心で理解した。

この言葉は人間の言葉で言い表せず書き記せないほど偉大でまた驚嘆すべきものであった。」(III ニーファイ19:32-34)

宗教は啓示によって神からもたらされるものであり、霊的事柄を扱うものである。従って人は啓示を受けない限り、宗教を受けているとは言えない。また天父の王国につける救いへ導く道の上にあるとは言えないのである。

私は、啓示を受けてきたのでイエス・キリストが神の御子であり、ジョセフ・スミスが予言者であって、彼を通してキリストと救いに関する知識が今日回復されたこと、また末日聖徒イエス・キリスト教会は文字通りこの地上における神の王国であることを証する。主イエス・キリストのみ名により、以上のことを心から証する。アーメン。

富裕の律法

十二使徒評議員会補助

フランクリン・D・リチャーズ

愛する兄弟姉妹、私はこの靈感あふれる大会に出席できることを特権であると同時に祝福であると感じている。私はまた我々の指導者の話の中に、今日ある多くの問題への答えを見いだすことができると思っている。

今日、世の中には財政的困難が見受けられるとはいえ、我々は一国民としてこの世の財源に豊かに恵まれてきたことを思い起こさねばならない。さらにまた、我々の所有物はすべて主のものであり、主は我々がどのように利用するかを見るために、それらのものを与えたもうたのである。

私はこう言えるのではないかと思う。すなわち、人生は神が人間に与えたもうた最大の贈り物であり、我々がその人生でなしたことが我々から神への贈り物となると。

我々の人生を神への贈り物とすることについて、ブリガム・ヤング大管長はこのように言われた。「我々の宗教は我々にとってすべてである。そのためであれば、我々は喜んで自分の時間、才能、手段、エネルギー、生活をささげることができる。」（『説教集』11：119）

さらに続けて、「もし我々が善をなせば、我々の才能、力、知性、この世の富は今後永遠に増し加えられていくだろう。」（『説教集』1：110）

「我々に結び固められたいかなる祝福も、我々がそれにふさわしく生活しなければ何の役にも立たない。」（『説

教集』11：117）

他の聖典にも見られるように、ここで福音の原則に従った生活をする人々に豊かな才能、富が約束され、神の王国建設のためにそれを用いるようにと勧められているのは興味深いことである。しかしながら富を得たために、またそれが不正な目的で使われたためにもたらされる誘惑に関して、聖典のいたる所で警告がなされている。

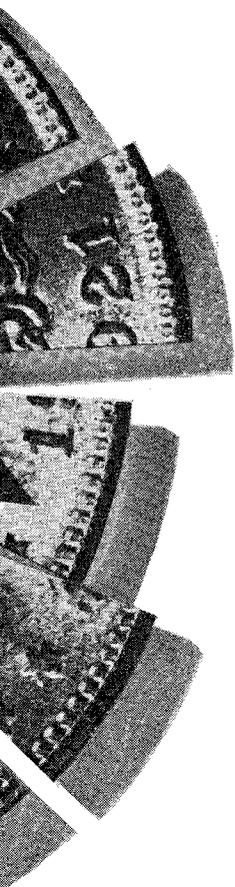
偉大な使徒パウロは、愛する同僚テモテに書簡を送り、こう述べている。

「金銭を愛することは、すべての悪の根である」また「この世で富んでいる者たちに、命じなさい。高慢にならず

たよりにならない富に望みをおかず、むしろ、わたしたちにすべての物を豊かに備えて楽しませて下さる神に、のぞみをおくように、また、良い行ないをし、良いわざに富み、惜しみなく施し、人に分け与えることを喜び……」（1テモテ6：10、17-18）

教会の歴史を通じて、指導者たちは働くこと、勤勉、儉約の原則の大切さを教えてきた。そしてそれらを実践してきたために、教会員はあらゆる方面で成功を収めているのである。また、教会員は経済的に独立するように勧められ、雇用を生み出す産業の建設が奨励されてきた。





人間の真の試しは、この世の富にどう対処するかということである。

114—115)

アンドリュー・カーネギーは、富に自分がどう対処するかを次のように述べている。「財産家には、第一に見せかけや浪費を避けて慎みある質素な生活の模範を垂れること、自分を頼りにしている人々の必要を適度に満たすこと、そして信託基金として自分に管理のまかされる余分なお金を考慮し、社会に最大の利益をもたらす最良方法で管理するという厳しい責任が与えられているのである——このようにして財産家は貧しい同胞の受託者、代弁者となり、すぐれた知恵、経験、管理能力を生かして彼らに奉仕し、彼らが独力でする以上の良い効果をあげるために努力するのである。」(「富の福音」)

富に関する私の哲学を、人はこう言い換えるかもしれない、「他の人々のために何かをしているかどうかによってその価値が決まる」と。

多くの点で、人間の真の試しはこの世の富にどう対処するかということである。

この考えに従うと、我々の仕事は神の王国を建設するためのものでなければならぬ。我々の多くは非利己的な思いから次のような言葉を口にする。

「お金さえあれば、美しい教会堂を建てたり、恵まれない子供たちのために学校を建て、必要な所には病院を建ててあげられるのに……」

おそらくこれらのことを独力でできるほどの財産を持っている人はほとんどいないだろう。しかし、我々にそうした望みがある限り、什分の一やその他の献金を含む寄付によって

我々のだれもがそのようなすばらしい計画に参加できるのである。

何代にもわたり、主はご自分の民に貧しい人々のことを常に心に留めるように、そして王国建設のために什分の一や他のささげ物を納めるようにと戒められてきた。

この神権時代に、主は我々に次のような啓示を与えられた。「誠に『今日』は犠牲の日、わが民の『什分の一』を捧ぐる日なり」(教義と聖約64:23) 今日相当数の人々が正直にこの戒めに従っていることを覚えていただきたい。しかし同時に什分の一やその他のささげ物を怠っている人々も多いためである。

主は言われた、「人は神の物を盗むことをするだろうか。しかしあなたがたは、わたしの物を盗んでいる。あなたがたはまた『どうしてわれわれは、あなたの物を盗んでいるのか』と言う。什分の一と、ささげ物をもってである……什分の一全部をわたしの倉に携えてきなさい。これをもってわたしを試み、わたしが天の窓を開いて、あふるる恵みを、あなたがたに注ぐか否かを見なさいと、万軍の主は言われる。」(マラキ3:8—10)

什分の一は神聖なものである。主はこの神権時代に啓示を通して言われた。「誠にかくの如く主は言う。わが教会の大管長会、監督その評議会……によりて、構成する会議により、什分の一たる財産を処理すべき時は至れり。また、これは彼らに告ぐるわが声によりて為さるべきなり……」(教義と聖約120:1)

これらの教えを実行するために、財産のある人はみな自分自身にとり、また家族や友人、神の王国にとって、最も価値あるものを生み出す最良の方法でその財産を利用するよう、賢明な生き方をすべきであろう。

もう一度ヤング大管長の言葉を引用したい。「民が神の王国建設のためにこの世の富をじょうずに利用しようとする時、神は我々に喜んでそれを恵んで下さるのである。人が勤勉、思慮深さ、じょうずなやり繰り、儉約のゆえに金銭的に恵まれ、それを地上の神の王国建設のためにささげる姿を見るのは喜びにたえない。」(「説教集」2:

世界中の教会の急速な発展に伴い、教会堂、学校、セミナー、神殿、病院、伝道本部、訪問者センターなど、ますます多くの建物や設備が必要とされてきている。

そしてこれら新しい教会堂や設備の建築費用にだけでなく、それらの建物を運営し、維持していくためにも相当の経済的責任を負わなければならないのである。

教会では死者、生者を問わずすべての教会員の霊的、物質的の必要に気を配るようにしている。教育、伝道、福祉、補助組織、社会奉仕、系図などのプログラムがそれに含まれる。世界的な規模で行なわれているこれらのプログラムも同様に、多大の経済的援助を必要としている。

我々は百年以上もの間今日のこの時代に目を向けてきた。そして今我々は主の戒めを守るならば、主は我々が自分自身の責任はもちろんのこと、教会の成長と発展にともなう経済的義務をも果たせる道を備えて下さるといふ確信を得ている。

使徒パウロは、コリントにいる聖徒たちに手紙を送り、こう述べている。「少ししかまかない者は、少ししか刈り取らず、豊かにまく者は、豊かに刈り取ることになる。各自は惜しむ心からでなく、また、しいられてでもなく自ら心で決めたとおりにすべきである。神は喜んで施す人を愛して下さるのである。」(Ⅱコリント9:6-7)

この神権時代に主はこのように言われた、「汝の持つ財産を貪ることなくして……惜しむことなく汝の財産を頒つべし。」(教義と聖約19:26)

我々が神の子供たちの幸福を思う財

産の受託者であるとするなら、価値の大小にかかわらず財産を崇拜するようなことはすべきではない。財産を崇拜している人があれば、悔改めをし、自分自身の価値を正す必要があろう。

我々はよく神の王国建設のために犠牲を払うと言うが、私にはそれが誤って聞こえる。王国の建設に携わることができるのは大きな特権であり祝福であると思うからである。

最近私は美しい小さな教会堂を献堂したが、その時私は、ワード部に割当てられた建築費用5千ドル(154万円)をまかなうために、監督がワード部の全会員にクリスマスプレゼントを小さな子供たちだけに限り、余った分のお金を寄付してくれるように頼み、それで資金がまかなえたということを知った。会員たちはそれが犠牲ではなく祝福を受ける機会であると考えて快く従ったのである。そして献堂式の日、多くの人々がその祝福を証したのである。

人が主に忠実である限り、払う額は重要ではない。未亡人や子供たちのわずかなささげ物も裕福な人々のそれと同様に重要であり、受け入れられるべきである。男性、女性、そして子供たちがみな神に正直であり、什分の一とささげ物をおさめるならば、主は彼らに知恵を与え、それにより彼らは主に正直でなければ得られない祝福を受けつつ余生を送ることができるのである。彼らは物質的にだけでなく霊的、肉体的、精神的にもいろいろな方法を通じて何度も祝福を受け、栄えるのである。私はこれらのことが真実であると証する。またあなた方の中にもそのような証を持っておられる方が大ぜい

いることと思う。

主イエスが言われたことを思い出し、頂きたい。主は「受けるよりは与える方が、さいわいである」(使徒20:35)と言われたのである。

では何のために富があるのだろうか。それは善をなすためである。それならば我々の富を神の王国建設のためにささげようではないか。きょうこの日を主に正直に什分の一とささげ物をささげる決心をする日にしようではないか。

私は神が生きておられ、イエスがキリストであり我々の救い主、贖い主であることを知っている。そしてこれはこの世の富よりはるかに重要なのである。

私はまた、予言者ジョセフ・スミスを通じてこの神権時代に完全な福音が回復されたこと、今日教会の頭として生ける予言者ジョセフ・フィールディング・スミス大管長がいることを証する。これも同様に、この世のいかなる富にもまさる尊いものである。

しかしながら、証だけで我々は救われない。神の戒めを守ること、すなわち真の末日聖徒としての生き方をすることによって救われるのである。福音を完全に理解し力を受けるには、福音に従うことの重要性を心に留めなければならない。

兄弟姉妹、我々よりも恵まれない人々の生活を豊かにするために、また神の王国建設のために主が我々に与えたもうた富を使おうではないか。そうすることによって我々の人生を神へのすばらしい贈り物とすることができるように、イエス・キリストのみ名により祈り奉る。アーメン。

西 部 へ 行 く

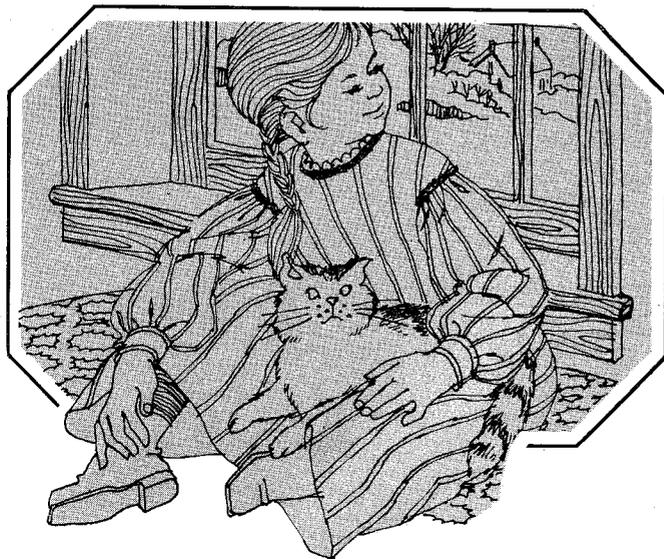
メアリー・プラット・パリッシュ
絵：バージニア・サージェント

ベッツィーは6才でした。これまでベッツィーはノーヴーでお父さんとお母さんとトミー兄さんと、しあわせな生活をしていました。でも最近彼女は何か気になることがありました。ほとんど毎日、だれかが彼女に「私たちは、草が芽を出し、雪がとけるころには西部へ行くのよ」ということを言うからでした。彼女は何のことを言われているのかよくわかりませんでした。けれどもそれは、もうじき彼らがノーヴーにある大きくてきれいな家をはなれて行ってしまうということなんだと考えていました。でもベッツィーはどこへも行きたくないと思いました。

彼女はかべにかかっている時計を見上げ、ふりがゆれているのを見つめていました。時計もいっしょに行くのかしら。そして大きなせもたれのついたすもいっしょに行くのかしら。台所ではお母さんが夕食の準備をしていました。ストーブも、テーブルも、いすもみんな持って行くのかしら。

みんななにに入れて運ぶのかしら。きのう彼女は、お父さんといっしょにかじ屋さんに、西部へいくために注文しておいた荷馬車を見に行きました。彼女は、その荷馬車は全部もっていくのには、小さいのではないかと思われました。

ベッツィーのこねこが彼女を見上げてにゃあとなきました。彼女はかかんでこねこをだきあげ、だんろの火の前にこしをおろしました。ベッツィーは窓の外に目をやり、かきねの上にもるで大きなマシュマロのようにつもっている雪をながめました。「西部へ行くには、今は寒すぎるわね、こねこちゃん。たぶんもっと暖くなるまで待つんだと思うわ。」それに答えて、こねこはひざをまるめ、まげた前足に小さい鼻をおしつけて、ねむってしまいました。かべにかかっている時計は、「おやすみベッツィー。おやすみベッツィー」と



ベッツィーは窓の外に目をやり、かきねの上にもるで大きなマシュマロのようにつもっている雪をながめました。「西部へ行くには、今は寒すぎるわね、こねこちゃん。」

彼女が目をさましたとき、みんなが話をしているようでした。トミーは、年とった小羊のネルの首につなをまきつけていました。お母さんは、小麦粉を地下室から持ってこなければならぬといっていました。またお父さんは、カバーのかかった荷馬車に何かを運びながらドアを出たり入ったりしていそがしそうでした。



言っているかのようでした。そしてまもなくベッツィーもねむってしまいました。

彼女が目をさましたとき、みんなが話をしているようでした。トミーは、年とった小羊のネルの首につなをまきつけていました。お母さんは、小麦粉を地下室から持ってこなければならぬといっていました。またお父さんは、カバーのかかった荷馬車に何かを運びながら、ドアを出たり入ったりしていそがしそうでした。

「どこに行くの」とベッツィーはききました。でもだれも答えてくれませんでした。彼女は寒かったのでコートを着て、じっと立っていました。彼女はお父さんの近くに立っていましたが、そのときお父さんは、トミーにいました。

「おまえのかわいがっている小羊を連れて行くことはできないんだよ。もし私たちが、春まで待つことができるならば、話はまたちがっていたかもしれないがね。春には、たくさん草や、水があるが、今は、地面は凍っているし、草や水もほとんどないんだからね。牛の世話をするためにえさがたくさんいるんだよ。

「でもなぜ今行かなければならぬの。なぜ春まで待つことができないの」とトミーはいました。

「それはね。ここにいるのは安全でないからなんだよ」とお父さんは答えました。「昨晚仲間のひとりがゆうかいされ

て、ひどい目に会ったんだよ。私たちに、彼が活着しているかどうか、それさえもわからないんだよ。それに3週間前には、2家族がとても寒い中を自分たちの家から追い出され、彼らの家がすっかり焼かれてしまったんだ。」

「けさ、ブリガム・ヤング大管長は、神権者全部と話し合い、多くのつらいことからのがれるために、すぐにここをたつことを決めたんだよ。だから今から出発するんだよ。わかるだろう。」

「もちろん食糧はたりなくなるだろう。そして家畜の分もたりなくなるだろう、しかしヤング大管長は、すべての人々に手を上げさせて、だれが何を持っていくか、その割りあてを決めたんだよ。そして自分の所有している物がなくなってしまったときには、主はわれわれを祝福され、より多くのものを与えてくださるであろうといわれたんだよ。だからトミー、おまえの小羊についてもだれかが小羊を見つけてくれるよ。」

ベッツィーは、トミーが手を顔の方に上げようとしているのを見ました。それは彼が涙をぬぐい去ろうとしているかのようでした。「今は8才の男の子が、おとなのようにふるまわなければならない時なんだよ。」

「でも、ぼくは何かぼくのものとして持っていくことができるものがあつたらいいな」とトミーは言いました。

お父さんは、しばらくだまっていたましたがこう言いました。「だれも自分だけのものをもっていける人はいないんだよ。私たちが持っているものはすべて、みんなのものなんだからね。でも私たちのためにしてもらいたいことがあるよ。それはたんすの一番上の引き出しの中に入っている古い旗だよ。おまえのおじいさんが、独立戦争で、自由のために戦ったときの旗だよ。さあそれを持っておいで。そしてよく世話をしておくれ。私はその旗がいつか私たちに必要になると思うんだよ。」

ベッツィーはどこに行こうとしているのか今わかりました。彼女はこねこをだいて、お父さんがこねこを連れていってくれないと思っていました。ぎゅっとだきしめたので、こねこはにゃあとなき、肩につめを立てました。でもベッツィーは、こねこをにがしませんでした。お母さんは、ベッツィーが涙をうかべて、こねこの背中をおさえつけているのを見て「どうしたの」と言いました。

「このこねこをいっしょにつれて行きたいの、いいでしょう」とベッツィーはいいました。お母さんはこまったようでした。ベッツィーは、窓の外にいる牛を見、そしてドアのむこうにおいてある荷馬車を見ました。それから、荷馬車のはるかむこうをながめました。「わかるわね、ベッツィー」お母さんはついに答えました。「私たちは牛を連れて行くのよ、もしも家族だけがそこに行くならば、あなたのこねこにもミルクをたくさんあげられると思うわ。でもね、牛をもっていない家の子どもたちも私たちといっしょにたくさん行くのよ。そしてその子どもたちにもミルクが必要なの。あなたがこねこをいっしょに連れて行くために、お腹のすく子どもたちがでてくるなんて、いやでしょう。」

ベッツィーは、目を見開いて「私は西部になんか行きたくないわ。私はこねこや、時計や、ベッドといっしょにここにいたいわ」といいながら、大きなせもたれのついたいすにこしをおろしました。そのいすは、赤ん坊のころ、よくお母さんにだかれてすわったものでした。ベッツィーはいっしょうけんめい泣くのをがまんしました。

見あげると、お母さんが涙をいっぱいにかへた目でベッツィーの方を見ていました。ベッツィーは、お母さんもまたこの家をはなれて西部に行くことをうれしく思っていないことがわかりました。そしてまるで赤ん坊のようにだだをこねたことをすまないと思いました。ベッツィーは、もう6才になっているのだから、今はおとなのようにふるまうべきだと思いました。

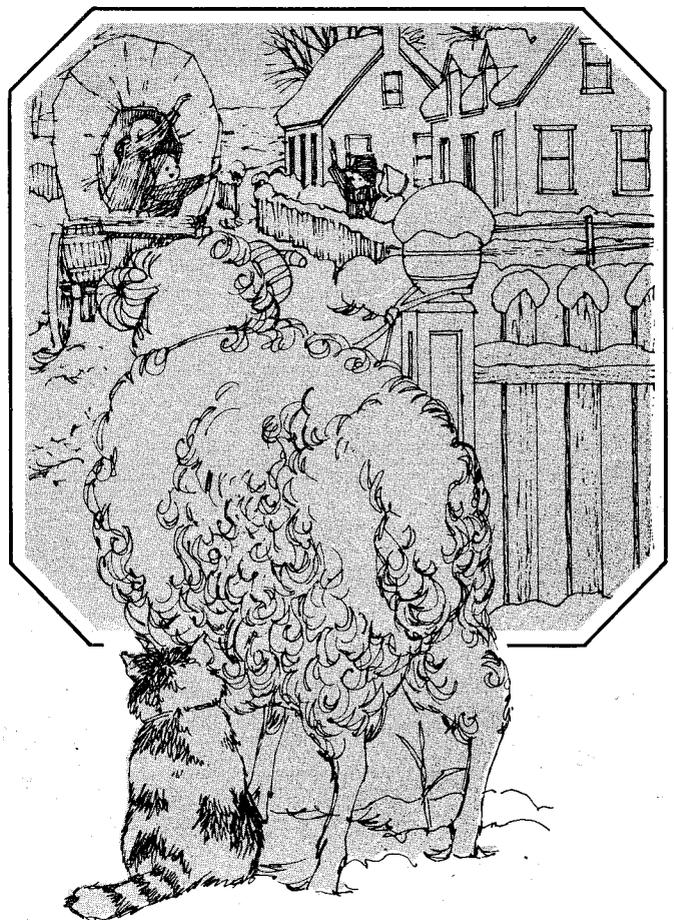
すばやくベッツィーはいすから立ち上がり、むねをはって

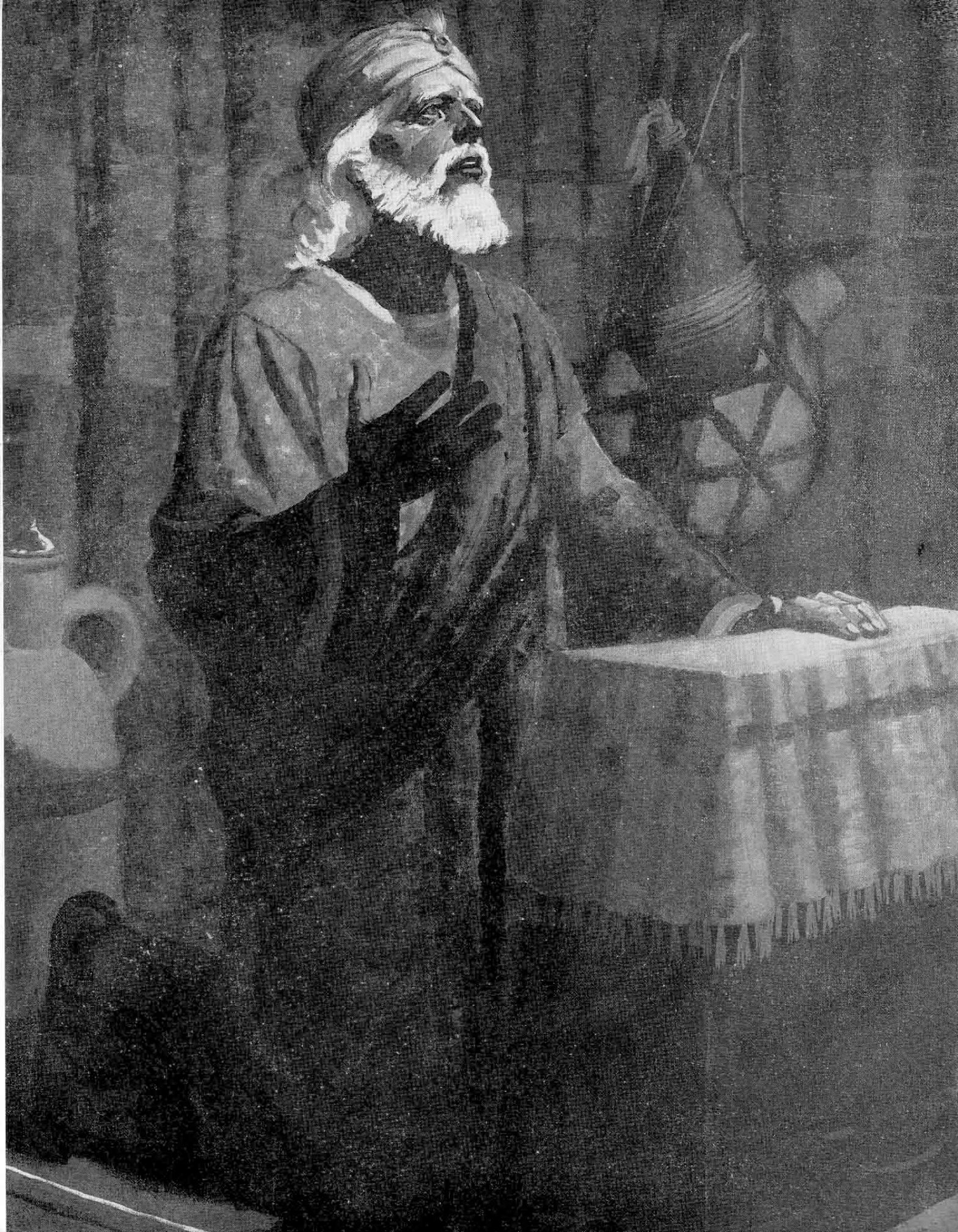
言いました。「私はお母さんの手伝いをするわ。西部へ行く準備をするのに私のできることはないかしら。」

お母さんはにっこりしてベッツィーをだきしめ、こう言いました。「あなたは、このせっけんを箱の中に入れることができるわね。石けんを作るようになるまでだいぶ間があるでしょうから。」

出かける準備ができました。お父さんとお母さんは荷馬車にこしかけ、ベッツィーとトミーは、羽根ぶとんの上におしをおろしました。そしてその羽根ぶとんは、荷馬車の底につままれた食糧をおおっていました。年とった小羊のネルは棒につながれ、牛がいたところにひとりであることを引き受けたかのように見えました。

自分の住みなれた家をふり返って見ると羊はまだ牧場にいました。かわいがっている小羊はずっと門の近くに立っていました。ベッツィーは彼女のかわいがっていたねこを見る事ができませんでした。暖かい家の中においてほしいと思いました。通りに面した人たちは皆、友だちや、近所の人に手をふっていました。その人たちもまた持ち物を荷造り、凍ったミシシッピー川の水の上に反射した夕やけがきえないうちに荷馬車を進めようとしているのでした。





リーハイ

エルサレムという大きな町は人々の騒ぎやうわさ話でわきかえってしまいました。それはユダヤ王ゼデキヤの治世の1年目のことでした。すべてがうまくいっているようにみえました。でも予言者エレミヤは、もし人々が自分の罪を悔い改めないなら、エルサレムはほろぼされるであろうと人々に言っていました。

リーハイはこの予言について知っていました。人々がそのことを話しているのを聞いたのです。彼のいちばん上の息子のレーマンは、「そんなことがおこるはずがない」と言い、また2番目の息子レミュエルも「まったくおころうはずがない」と言いました。でもニーファイとサムは何も言わずに父親のリーハイの言うことに従いました。

リーハイと妻のサラリア、それに4人の息子たちはずっとエルサレムに住んでいました。リーハイはたいへんなお金持ちでした。また彼は商人で、ぶどうやオリーブやいちじくを栽培したりはちみつをとったりすることによく熟練した人であったと言われています。彼は学問のある人でユダヤ人の言葉とエジプト人の言葉をよく知っていました。

それでリーハイは出て行って、自分の国の人々のために主に祈りました。すると主はリーハイに、これから何がおころうとしているかを示されました。このことを聞いたり見たりしたリーハイは、たいへんおそれおのいてエルサレムにある自分の家に帰って行きました。ふたたび主はリーハイに、もし人々が悔い改めないならばエルサレムはほろぼされるであろうといわれました。リーハイはそのことを警告しましたが、ユダヤ人たちはそれに耳をかたむけようとはせず、反対にばかげたことを言うなとリーハイをあざ笑い、彼を殺そうとまでしました。

主はリーハイに彼の家族をつれて、荒野にのがれるようにと言われました。そこでリーハイは、持っていた金銀財宝を残して、大急ぎでエルサレムにある自分の家をはなれました。彼は自分の家族と食糧とテントだけをもって荒野へ旅立ちました。

彼らは3日間荒野を旅しました。それからリーハイは大きな谷間の川のそばにテントをはって、そこに石で1つの祭壇をつくり主に感謝をささげました。

しかし上の2人の息子のレーマンとレミュエルは感謝をするどころか「エルサレムはほろぼされません。おとうさんた

ちはあんなにすばらしいエルサレムの家ですてて、この荒野に出てくるなんて、ばかげています」と父親

のリーハイにはむかって言いました。

リーハイは息子たちに、私はエルサレムに何がおこるのかわっているのだと話してきかせました。彼はみたまにみたされて、力強く話したので、息子たちは身をふるわせ、心を和らげて父親に従って行きました。

主はリーハイに、荒野の奥深くはいる前に、息子たちをエルサレムに行かせて、彼の民の神聖な記録と、家族の系図がかかっている真ちゅう版をもってくるように言われました。息子たちはしばらくの間エルサレムに真ちゅう版をとりにもどりました。その間、母のサラリアは彼らが死んでしまわないかと、心配していました。彼らが無事にもどってきたとき、サラリアは言いました。「私は今、たしかに主は私たちを導き、守ってくださることがわかりました。」

ふたたび主はリーハイに息子たちをエルサレムに送りかえして、イシメルとその家族をエルサレムからつれだしてくるように言われました。彼らは言われるとおりにしました。のちに、リーハイの息子たちは、イシメルの娘たちと結婚しました。

今や、リーハイは、命じられたすべてのことをはたしました。その夜主はリーハイに話しかけられ、よく日荒野の旅をつづけるようにと言われました。次の日の朝、リーハイがテントから出たとき、彼はたいへんおどろきました。それは地上にしんちゅうで作られためずらしい細工の玉があったからです。

その玉の中には2つのほりがあって、1つのほりは彼らが進むべき方向を示していました。リーハイはこれを導き手とか、らしん盤とか、リアホナとかよんでいました。それは「導きは主のもの」という意味なのです。リアホナは、荒野の中で土地の最も肥えたところへ導いていってくれました。家族に食物が必要になったときには、リーハイは主に求め、玉に示された方向によって、食物のありかを見つけることができました。リアホナは、彼らに導きを与え、多くのことを命じました。というのも、彼らはけんそんで、主に対して強い信仰をもっていたからです。このようにして、リーハイは約束の地へと、彼らの家族を導いて行ったのでした。

マダリンはようふくをかかえて、かいだんをおり、お母さんが朝ごはんをよういしている台所へいきました。お母さんはマダリンをみておはようといいましたが、マダリンのかおが青くてげんきのないのをみて、「どうしたの。ぐあいでもわるいの」とききました。

マダリンは「ううん」とこたえました。でもそれきり、なにもいわないでいすにこしかけ、うつむいて、ゆかばかりみていました。マダリンは、さっ

きみたおかしなゆめのことをどういったらいいか、そしてお母さんはゆめのはなしをきいてどう思うだろうか、わからなかったのです。

ゆめのなかで、マダリンはおねえさんになって、ブドウ畑のそばのほそながいまきばにすわっていました。やぎがブドウの木の方へいってブドウをたべないようにみはりしながら、ひぎに日よう学校の本をひろげてよんでいたのです。マダリンがかおをあげると、びっくりしたことに、みたことの

ない男の人が3人たっていました。

マダリンはゆめのなかでこわかったことをおもいだして、もういちど、みぶるいしました。でもすぐに、ゆめのなかとおなじく、あんしんしました。ゆめのなかにでてきたひとりの男の人はこうだったのでした。「おそれてはいけない。わたしはずっととおい所から、あなたにほんとうの永遠の福音をおしえにやってきたのです。」

それからその人は、ひとりの天使がある少年に、土のなかにうめられてい

マダリンのみたゆめ



る大せつな金の本をほりだすように、めいれいしたということをおしえてくれました。その男の人たちは、マダリンもいつかその本をよめるようになって、あるあたらしい教会にはいり、たくさんのくるしいことにもまけないでがんばるようになります、といいました。

あたたかく、おいしいにおいのただよう台所で、マダリンはじぶんのみたゆめをもういちどおもいかえしていました。マダリンのかおいろがまた青く

なって、ぶるぶるふるえはじめたのをやぎのちちしぼりからかえってきたお父さんがみつけて、お母さんとおなじに「どうしたんだい。ぐあいかわるのか。」とききました。

マダリンはただ首をふるだけでした。お父さんはマダリンのわきにしずかにこしかけて、マダリンのくつ下をひろい、なにもいわずにマダリンがようふくをきるのをてつだいはじめました。そしてそれがすむと、マダリンをひざの上にだきあげて、やさしくいきました。「マダリンはパパになにかいいたいんじゃないかな。」

マダリンはこくと首をふりました。なにからいったらよいのかわかりませんでした。はなしたいあまり、ことばとことばがごちゃごちゃになってるみたいでした。

お母さんは、イチジクとじゃがいもとやぎのミルクのかんたんな朝ごはんのしたくをおえて、マダリンのみたふしぎなゆめのおはなしをききました。お父さんは、まるでマダリンよりもっとたくさんのことをしているみたいに、ときどきうん、うんと首をふりながら、耳をかたむけてききました。

そのばん、かぞくのみんなは、よるのおいのりをするためにあつまりました。お父さんは、かぞくがどうして北イタリア・アルプスの上にあるこの小さな村にすんでいるかということをもういちどはなしてくれました。何年も前に、おじいさん、おばあさんは、この山のふもとのきれいな村にいえをたててすんでいました。そこでは、人びとは、キリストのときにいた使徒たちのおしえをまもって、たのしいあわせな日をすごしていました。パウドの人たち（アルプスの谷にすむ人たちといういみ）は、おしえをおしえるせんきょうしを、2人ずつおくらせていま

した。ほかの国々からも大ぜい教会にはいる人ができました。

そのことがやがてローマにもつたわって、パウドの谷に、あなたたちはじぶんたちの教会をやめて、ローマの大きな教会のいうことをまもりなさいというてがみがとどきました。人びとはそれにいいえとこたえました。パウドの人たちは、それよりも新約せいしよのおしえのほうを、しんじていたので

す。イノセント7世教皇は、それにおこり、パウド派教会の人をやっつける十字軍をおくることにきめました。やがてパウドの人たちのへいわな村は、かなしみの村にかわりました。おちている石ひとつにも死のかげがさして、生きのこった人たちはいえをおわれました。人びとはけわしい山を、上へ上へとにげていきました。

それから、しんじられないほどのくるしみをなん年もうけて、パウド派の人で生きのこったのはわずか300人ほどになってしまいました。その人たちは、アルプスのピドモントの谷の高い所にすみつきました。その村は山のしゃめんにしがみついているようにみえました。まわりはだれも近づくことのできないわやぜっぺきにかこまれた村でした。

せいかつはらくではありませんでした。まい年春になると、女の人や子どもたちはけわしい山をおりて、冬のあらしでだんだん畑からけずり取られた土をかごに入れて上まではこばなければなりません。でも、そこはけわしい山の中で、だれも来ないようなところなので、人々はえんりよすることなく、おじいさん、おばあさんたちとおなじように、空にむかってりょう手をあげ、いえやかみさまへのしんこうをしぬまでまもるとかたくちかいました。



マダリンのかぞくは、このおはなしをなんどもきいていました。けれどもつきいてもあきないのです。いちばん小さなこどもたちさえ、りっぱでよくてゆうかんだったおじいさん、おばあさんのおはなしをきいて、むねをわくわくさせました。大きなこどもたちは「光はやみのなかにかがやいている」というあいことばをいって、じぶんのいえや教会のことをかんしゃしました。

ほかのみんながねはずまったそのばん、おそくなってから、マダリンはお父さん、お母さんのはなしごえを耳にしました。ねむってしまうまえのおほ



えているさいごのことばは、「でも、わたしたちはまことの福音をもうもっています。マダリンのはなしにとくべつないみなどありませんわ。」といいはるお母さんのこえでした。

マダリンはお父さんのへんじがききませんでした。それからなん年かたつうちにも、お父さんはときどきあのゆめについて、マダリンにたずねました。マダリンがこまかいことをずいぶんわすれてしまっても、お父さんはちゃんとおぼえていました。

マダリンがゆめをみてから8年ほどすぎ、サルジニアの王さまは、イギリスなどの国からピドモントのプロテス

タントをはくがいするのはやめなさいといわれて、パウド派の人に、しんこうのじゆうをゆるしました。800年にもわたるおそろしいたかいは、1848年2月にようやくおわりました。

そのちょうどよく年、あとで教会の5代目大管長になったロレンゾ・スノーが、イタリアに伝道をはじめようめされました。でも、スノー長老とあとふたりのせんきょうしは、はなしをきいてくれそうな人を見つけることができませんでした。がっかりしたスノー長老は「わたしは、もくてきをはたすためのほうほうをみつけられそうにない。すべてはやみである」とかきました。

1850年9月18日に、ロレンゾ・スノーとふたりのどうりょうは、北イタリアのたかい山にのぼり、大きなつきでたいわの上で、かみさまのみちびきをねがい、ねっしんにいのりました。そのとき、3人はれいかんをうけて、その国を福音のおしえられる国として、ほうけんしました。そして、3人のたっていたいわを「よげんのいわ」となづけました。

せんきょうしたちは、山をおりるまえに、「はくがいじだいのパウドとざんしゃのさんびか」をうたいました。そのうたは、はくがいされた人たちのかくれたほらあなやいわのさけめからいくどもながれてきては、谷まにきえていったうたでした。パウドの人たちが、おきをとって山みちをまもったときにうたったうたでした。そして教会のれいはいでもかんしゃしながらうたったうたでした。そのうたを、いま3人のせんきょうしがよげんのいわにたつてうたっているのです。

山のつよさのため わが神たう
主は山の地にて 子らをきたえぬ
そのすぐあとの土よう日のごと、マダリンのお父さんは、となりのいえの

えんとつこうじをおえて、はやめにいえへかえりました。お父さんはかぞくに、3人のがいこく人が、大せつなことをおしえにやってきたことをはなしました。そして「わたしはいちばんいよいよふくをきて、かれらをむかえよう」といいました。

お父さんは日よう日のあさ、さがしていたその人たちをみつけ、じぶんのいえへつれてかえりました。みんなはくねくねとまがった山みちをのぼり、きけんほそいみちをとってやってきました。そのとちゅう、マダリンのお父さんは、なん年もまえにマダリンがみたゆめのことを、はなしてきかせました。

みんなが小さな石でてきたいえについたとき、マダリンは、ブドウ畑のそばの小さなまきばにすわっていました。マダリンは日よう学校の本をよんでいて、目をあげると、3人の男の人のかおが目にはいました。男の人たちはマダリンに、じぶんたちは、土にうめられていたすばらしい金の本にかいてあるおしえをつたえにやってきましたといい、いますぐ、その本をよめますといいました。

そのばん、マダリンのとなりの人たちも、がいこく人にあいやってきて、おしえをきました。そのはなしはふしぎでめずらしいので、その末日聖徒イエス・キリスト教会のせんきょうしのおしえるあたらしいしんりについて、よるじゅうかかっても、もっとしりたいという人たちもいました。

1850年の10月に、いくつかのバプテスマがおこなわれました。そしてあわせて20のかぞくの人たちが福音をうけいれ、そのようにして、マダリンのみたゆめは、ほんとうになりました。パウドの人たちのすむところは、「やみのなかにかがやいている光」となったのでした。

聖霊はいかにして あなたを助けるか

七十人最高評議員会会員

S. デルワース・ヤング



今までの生涯を振り返る時、私はもう少しで死ぬところを危機一髪で助かったいくつかの経験を思い出す。そのような経験は小さい時から始まっていた。

私が11才のある朝、兄と従兄と私と4番目の男の子は、ソルトレーク市のクリーク峡谷のふちへ行った。

4番目の子は通信販売の22口径ピストルを持っていて、バ



ッファロー・ビルは銃を高くあげてからゆっくりさげ、水平になったら引金を引くなどと、私たちに説明していた。突然私は自分の左手がしびれるのを感じた。見ると、左腕の二頭膊筋のあたりで白い袖に赤いすじがしみていた。赤いすじはみるみる大きくふくらんできた。私は「うたれたんだ」と叫び、家へ走った。

弾丸は腕を貫通したが、骨にも動脈にもさわらなかった。私はみんなの中で左端におり、銃を持った子は右端にいた。弾丸は私の心臓のあたりの前をかすめていったのだった。そうでなければ、私の左腕に命中はしなかったはずである。もし銃が4分の1インチでも左に寄っていたら、私は今ここにいなかったことであろう。

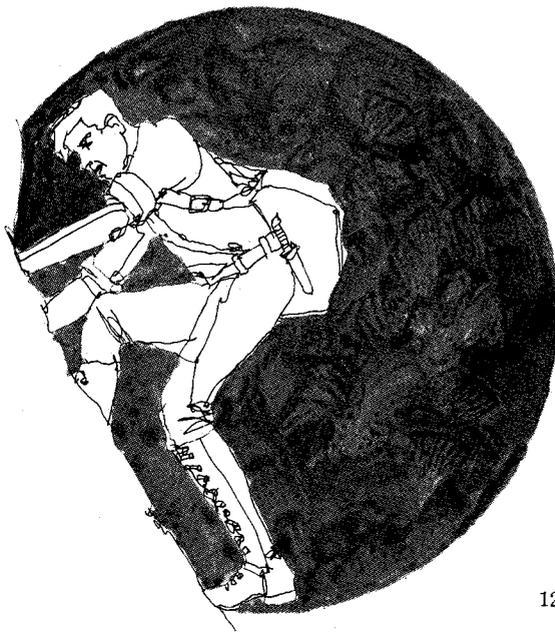
私はそれからずっと、私の身を守ってくれたものが何であったかを考えてきた。私は自分が守護されるにふさわしい者であると言うものではないが、あの時、自分は守られたと信

じているのである。

2番目の出来事は、29才の時のことである。9月のある晴れた日、私は仲間と共にコロラドのロング・ピークに登った。ロング・ピークは標高4,750メートルであった。その高度では、3、4歩登ると足感覚がまひするので、3、4分休んで力を回復してから次の3、4歩を登るのだった。

私たちが頂上へ着いたのは午後おそくであった。私はそこに立って、数百メートル下から始まっている尾根を見おろし、下りの時間を半分に切り詰め、同僚の警告もさほど気にとめずに、山の北側を降り始めた。そうしておよそ180メートルほど行くと、急に昨夜の嵐でできた氷原にいる自分に気づいた。

私は左手のへりにそい、何百メートルも落下してようやくがけの所でとまった。その苦境から抜け出すには、頂上へ戻るしかなかった。そこからはいあがる危険性についてお話しするつもりはないが、私はその日早いうちにかなり楽な道まで2時間でたどりついた。それからは休みなしに足もまひせず30分で帰って来たのである。その力はどこから湧いたのだろうか。アドレナリンのせいだろうか。ある人はそう考えるであろう。しかし、それはまったく違う力であった。私自身を越えた力であった。

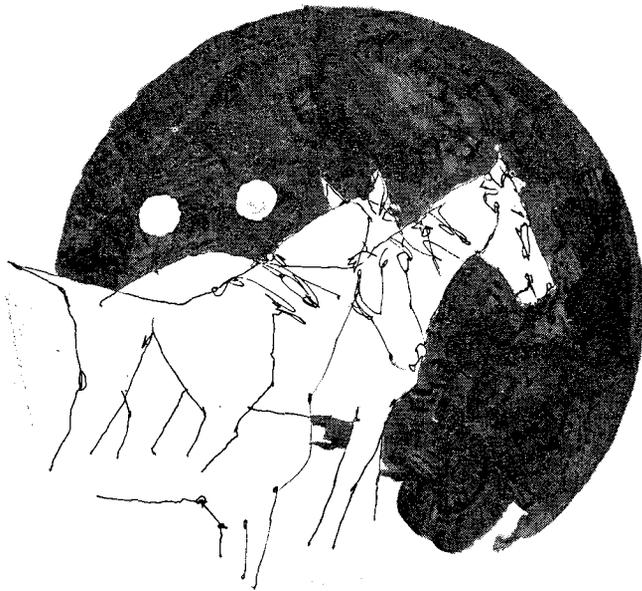


その午後、私はもう1つ別のことを学んだ。私は登っている時、仲間の1人が吹く笛の音を聞いた。頂上へ着いてみると、そこにはゴールデン・キルバーンが立っていた。他の仲間たちはあの道を下っていったが、彼は自分自身危険をおかして、私を見つけるまではそこを離れないつもりで待っていたのである。

私たち2人はいっしょに山を下り、雪のない安全な場所にたどりついた。もし時間が遅れていたなら、2人とも3千500から4千メートルの高さでコートもなしに夜を迎えていたことであろう。しばしば思うのだが、こごえるのがけから3千フィート落ちると、どちらがいやであろうか。また、まったく知らない所を30分というわずかの時間で到着できた力に驚くこともたびたびである。

3番目の出来事は、1946年から翌年にかけての冬に起きることである。私は49才であった。ヤング姉妹と私は、メキシコで彼女の兄弟の葬式に行く途中であった。私たちは夜の9時半に、コロラド州コルテスを出立してニューメキシコ州ギャップに向かっていた。ひどく寒い夜であった。気温はその晩氷点下10度にまで下がった。

横なぐりの風が吹き、地面に猛吹雪がたたきつけ、道は見えず、進行困難になった。車にヒーターはなく、私たちは蒲



団にすっぽりくるまった。時速80キロの速さだったと思う。

突然暗やみと嵐の中から、右から左へハイウエイを横断している2頭の馬の姿が浮かびあがった。2頭は道を左の車線へ向かって横ぎり始めたばかりのところであった。私は反射的に、というも考える時間はなかったのだが、ハンドルを左に切っていた。そして次の瞬間、車は左に行きすぎて、左車輪が路肩にのりあげてしまった。車がギギーッという間に先頭の馬は頭をのけぞらせ、鼻先すれすれに無事であった。次の瞬間、私たちの車はもとの車線に戻った。馬をひかず、しかも車が道路のわきに落ちてしまわないだけハンドルをまわしたのだが、それは無意識であった。私は運転したのが自

分でなかったことを知っている。

他にもそのようなことがしばしばあった。確かに、ある人々にとっては、みな理由のつけられることである。表だってはっきり奇跡とわかることは何1つない。しかしどの場合にも、神の助けがなかったならば、私は助かってはいなかったのである。私はこれまで、人々があの声を聞き、それに従うのを聞いたり読んだりしてきた。語りかける声を現実に聞いてはいないが、あの経験を信じている。ある時モルモン経を読んでいて、レーマンとレミュエルがニーファイを殺そうとしたところにゆきあたった。ニーファイが彼らをけん責した言葉をあなたも覚えているに違いない。

「あなたたちは、これまでに一人の天使を見、天使はまたあなたたちに言葉をかけた。まことにあなたたちはその御声を時々聞いている。その時それは静かな細い声で話したもうだが、あなたたちはなんらの感じもなかったその御声を感ずることができなかった。それでそれは雷のような声であなたたちに語りたまひ、その声はあたかも引き裂かんばかりに大地をゆり動かした」(I ニーファイ17:45)

私はこれまでにこの聖句を幾度も読んでいたが、いつも、それは反逆する兄たちに、かつて与えられた証を思い起こさせる言葉だとばかり考えていた。

しかしその時、私の心は照らされた。輝く光がさし込んできた。私は、ニーファイが、聖霊はどのようにして私たちに靈感を与えたもうかという方法について説明していたと理解できたのである。「静かな細い声」、「なんらの感じもなかった」、「御声を感ずることができなかった」——これがそれである。あなたが靈感を受ける時、心にはある確認の感情が伴う。あなたは聖霊が証するのを理解し、認識するのである。聖霊は、常に言葉とは限らないが、静かな細い声で語りたまう。

私は十代の頃、主のみ声を聞くのはどんな感じだろうかと考えたものである。モーセ、イザヤ、バプテスマのヨハネ、そしてことにジョセフ・スミスは、特別に愛された人たちだと思い、自分のみ声が聞けたらと考えたのであった。冒とくの気持はなく、それは正直な願いであった。私はみ声を聞く特別な召しが与えられなければ、主は自分に注意を向けたださらないと、よく知っていた。天よりの声は、記録された歴史にはまれである。

この願いに対する答えは、ニーファイと兄たちに関して向けた答えと同じように、私にとってはまったく劇的であった。10年ほど前のある日(私は64才であった)、私は教義と聖約の18章を読んでいて。そこにはこのように記されていた。

「これらの言は世の人々より出でしにもあらずまた人間の言にもあらず、われより出でし言なり。この故に汝はこの言がわれより出でし言にして、人間より出でしにあらざること証すべし。この言を汝らに語れるはわが声なり。そはわが「みたま」によりて汝らに与えられ、わが能力によりて互いにこれを読むを得るなり。されどもしわが能力によらざれば、汝らこれを有つこと能わざらん。これを以て、汝らわが声を聞きわが言を知るを証するを得べし。」(教義と聖約18:34-36)

ここで主は、定員会が組織される5年前、十二使徒に向かい、主のみ言葉を読む時には、主のみ声を聞いているのだと告げておられる。それはあたかも天が開かれて、過去に記録を残した予言者たちに与えられたすべての啓示を自分に知らされることである。その時から、教義と聖約は私にとって新しい意味を持つものとなった。読むと同時に聞き、主のみ声ははっきりと私の心に響きわたるのである。私はこの人を高める偉大な書物を読むことを楽しみにしてきた。今、私は畏敬と驚嘆の心をもってこの書物を読んでいる。

私はそれをどうして17才の時に感じなかったのだろうか。あなたは70才になるまで理解する日を待ってはいならない。真心から願うことと聖霊の助けにより、啓示を得る時にはいつも、主のみ声を聞く力が与えられ得るのである。

私はずいぶんあとになって、もうひとつ大切な原則を学んだ。あなたにとって何らかの参考になることを願い、それを述べようと思う。それは53年前の1918年、私が第1次世界大戦に軍人となっていた時に始まった。休戦のあと、私たちの連隊は帰国の順番待ちの間にフットボールのチームを編制した。私はチームのメンバーだったため、訓練や下仕事や一般規則を免除された。メンバーだけは、いつでも一番近い町であるボルドーへ行けることにもなっていた。

そこで私は、その町を訪れた際に、大会堂に掛けられている好きな絵画を鑑賞した。それはラザロを生きかえらせているキリストを描いたものであった。ひどく大きな絵で、縦横15フィート、8フィートほどの傑作であった。そのあとYWCAに行って手紙を書き、最後に、キャンプへ帰るトラックが待っているはずの広場へ行った。

建物のかげに立っていると、チームのメンバーがやってくるのが見えた。彼は薄明るい街灯の下に立ってトラックを待った。するとまもなくフランス人の女性が近づいてきて彼に声をかけた。彼はフランス語が話せなかったが、その女性が使った言葉は万国共通のものであった。彼はまわりを見回してだれもいないのを確かめたあと、その女性といっしょにその場を立ち去った。

それからしばらくして除隊になり、私たちはソルトレーク市へ帰った。1人の婦人が出迎えていたが、それはあの男性の妻であった。彼女は彼にかけより、赤ん坊を腕に抱かせた。私はそこに立ちつくして、彼が自分の子供に見入る姿を見ていたが、彼の胸中はどうのようなものかと思った。私は今もその気持がわからない。

それは1919年の1月、52年も以前のことであった。私はこの話を5年ほど前にも「罪の支払う報酬は死」、少なくとも霊の死であるという道徳を強調して、話したことがある。

私が話している時、急にある考えが心にひらめいた。もし私が建物のかげになっているところから出て、彼のところへ行ったら、あるいは彼に声をかけるか、とにかく私がそこにいることを知らせていたなら、彼はあの女性について行かなかったかもしれないということである。簡単な1つの行動によって、私は彼を救えたかもしなれなかった。しかし、私はそ



の時それができなかったのである。その考えが湧いて以来、私は自分自身もいけなかったと思いつけてきた。

私の生涯で幾度、1つの言葉、動作、外見で、だれかの道を変え、正しい道に導くことができたはずだったであろうか。あなたはどれだけ人を助けたことがあったであろうか。

キリストの教会に属する者はみな、罪がこの人生や永遠の生活にとってどんな役割を果たすかを知っている。そのため私たちは自分の罪を心配するのである。しかし、私たちが声をかけてあげたら防げたかもしれない他人の罪についてはどうであろうか。

若い男女のみなさん、あなた方は聖霊を感知するために、何がしかの試しを免れることはできない。しかしこのことを覚えていてほしい。あなたがふさわしい生活をするならば聖霊の力により守られ、正しい道へと導かれるのである。

一瞬の差で守られるにしる、み言葉を心に感じるにしる、書物の中にみ声を聞くにしる、それは神から来る。それらはみな、バプテスマの時に聖霊を受け、聖霊の影響を受けようと心している人に授けられるみたまの賜なのである。

あなたは、まわりの人をどのように導き、警告しているかについても試みられている。警告もせずに、迷っていく人を放っておくのは良くないことである。もちろん、故意に他人を迷わせるのは、さらに悪いことである。

世界は広く、あなたの発見すべきことは多くある。しかし主のみ声を感じ、み言葉を聞くことを知らなければ、達成するものはごくわずかしかないのである。聖典を読みなさい。あなたの魂が感動する時には、それらの約束を経験しているのである。年若い成長する時代に、心で感じる賜を経験し、学んで、第1の大きな戒めと、それと同様の第2の戒め(神と人とを愛すること)を実践することを身につけるならば、あなたは偉大な希望と永遠の報酬を受けるであろう。そして人生は、あなたにとって常に美しいものとなるであろう。

現代の社会問題

ウィリアム・E・ベレット

少し以前に、ある日曜学校教師が、前年度から受け持っているクラスの生徒から手紙を受け取った。その青年は家を離れて大学で学んでいた。彼の書いてきた問題というのは、形は変わっても、教会の教師全員に出される問題である。

学生は改宗者であった。とにかく3年ほど前にバプテスマを受けて、教会員になったのだった。しかし彼は、教会員はキリストへの信仰や隣人に対する愛を言い表わしはするが、それらの信念が行動になっていないと思うようになった。

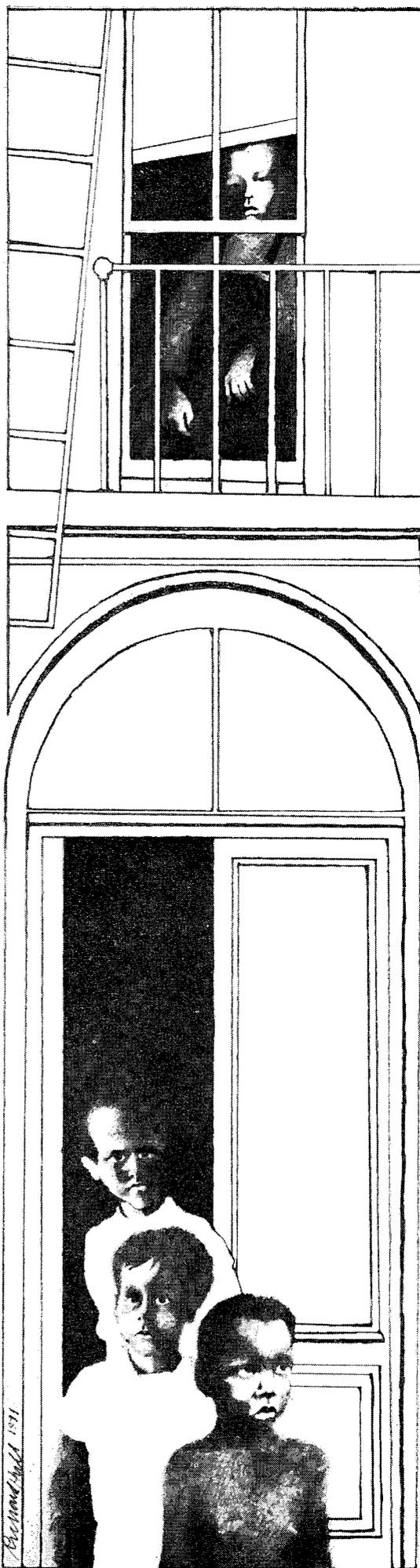
彼は特に、教会の財産を失業者数の緩和や低所得者や戦争被害者のために役立てないことについて書いていた。

確かに、イエス・キリスト教会は1つ1つの社会問題に関心を持たねばならず、この青年の考えは立派である。彼の精神は軽んじられるべきではなく、見習うべきものである。

我々の大部分はこれと同じような問題に関心があり、教会指導者として少なからぬ関心を抱いている。それはともかくとして、世の社会状態は我々の望む状態ではなく、問題の本当の重要点は、それに対して何をなすべきかということにある。もっとはっきり言って、末日聖徒イエス・キリスト教会はそれに対して何をなすべきであろうか。

この質問に答えるために、イエスはこの地上におられた間、このような問題に対して何をなされたか、また現代に何をなせと予言者に教えられたかを、もう1度考えてみるとよい。

現代の社会問題は珍しいものではない。イエスは重大な社会問題をはらむ世に生まれたもうた。パレスチナでは金持と貧乏人との間に大きな隔たりがあり、あらゆる町や村に乞食が見られ、病気は蔓延していた。パレスチナ住民はローマの下にしいたげられていた。盗みは日常茶飯事で、1人旅の旅行者をおそう。あの良きサマリア人の話は、実際によく起きる出来事からとられたのであった。武器を持たずに夜戸外へ



出る人はいなかった。主の使徒たちでさえ、ゲッセマネの場の記述でわかるように時々武器を身につけていたのである。

事態を正常化し、平等を実現し、奴隷の身をのがれ、飢える人を救おうという政治的な運動も行なわれていた。そのようなグループの1つは好戦的で、革命を起こすことにより自分たちの目的を実現しようとしていた。そのゼロットというグループ（ユダヤ教の熱狂的信者）は、キリストを自分たちが求めていた指導者だと考えた。彼らはイエスに王冠を捧げたと記録されている。イエスは人民の間で最も人気があった。しかし、イエスが社会悪を是正しようとする運動を拒んだ時、群衆はイエスから遠ざかっていった。イエスは十二使徒に「あなたがたも去ろうとするのか」と言われた。それに対するペテロの答えは御存知のとおりである。ペテロは「主よ、わたしたちは、だれのところに行きましょう。永遠の命の言をもっているのはあなたです」と答えた。（ヨハネ6：67—68）

イエスは飢える者を満腹にする力を持っておられた。そしてみ言葉を求めてイエスの近くガリラヤの湖のまわりに集まってきた5千人の人々に食物を与えられた。しかしその答えはパンでも着物でも家でもない。答えは人の心の中にあるのである。

人々の隣り人に対する冷酷な仕打ちに心を痛み、最も卑しい人のために時間をとられたイエスは、人が、その人の持つ思いや人生哲学、人生の目的についての理解の程度、全能者に対する態度以上に高められることはないを知っておられた。それらは人の状態を決定する事柄である。

それゆえ、イエスは真理の福音を教えることと、バプテスマを施すために使徒や七十人たちと共に教会を建設することに御自身を捧げられた。イエスは、個人が変わることにより社会が変わること、個人の変化はその人の精神が変わることによって生じること、そして精神の変化は神とその戒めを受入れることからもたらされることを知っておられた。

結果は何であっただろうか。人が試みた社会運動、政治運

動はすべて失敗に終わったのである。しかしイエス・キリストの福音は、それを受ける人々を変えた。我々は教会についてこう記してあるのを読む。

「信じた者の群れは、心を一つにし思いを一つにして、だれひとりその持ち物を自分のものだとは主張する者がなく、いっさいの物を共有にしていた。使徒たちは主イエスの復活について、非常に力強くあかしをした。そして大きなめぐみが彼ら一同に注がれた。彼らの中に乏しい者は、ひとりもいなかった。地所や家屋を持っている人たちは、それを売り、売った物の代金をもってきて、使徒たちの足もとに置いた。そしてそれぞれの必要に応じて、だれにでも分け与えられた。」（使徒4：32—35）

福音の一部分しか受けていなかった人々の間にさえその変化があったことは、西暦第2世紀に生きていたジャスティン・マルティルが述べている。

「ひとたび肉欲の奴隷であった我々が、今や清い道徳の中にも喜びを見出している。かつて魔法の術を行っていた我々が、永遠と善の神に一身を捧げている。かつて何にもまして利得を尊んだ我々が、自分の持てる物さえ公共の使用に供し、乏しい者に分け与えている。かつて互いに憎み殺しあった我々が、習慣が違うために異国人と嫉妬を囂もうとしなかった我々が、今やキリストの出現により、彼らと共に生活し敵のために祈り、理由なく我々を憎む者を、キリストの栄光の教義に従って生き、神なるすべての主から我々が受けると同様の祝福を受けるとの喜ばしい望みを得られるよう、説得しようとするのである」（オーガスタ・ニンダー、「キリスト教と教会の歴史」ジョセフ・トレイ訳、第11版第1巻P250）

モルモン経には、救い主の福音が人々の病いをいやすための何よりの力であることを示す例がある。

アルマは自分が長となっている政府が、法律や勅令では民の間の罪や不平等をなくすることができないのを知り、大判事という指導者の地位を人に譲り渡して、個人個人に接触する

伝道活動により民を変えようと宣教に出た。「神の道を宣べ伝えるのは民に正しいことを行なわせるのに非常に効があって、剣やそのほかこれまでに用いたことのあるすべての方法よりも強く人の心を感化するから、アルマは神の道の力を用いる必要があると思った。」(アルマ31：5)

神の道を宣べ伝えることは確かに力があつた。民は次々と義しく変わっていった。キリストがアメリカ大陸に現われたのちの黄金時代に、福音の教えは次のような影響を及ぼした。

「そればかりでなく、一同は一切の所有物を共有したので富んでいる者と貧しい者との区別もなく、自由な者と奴隷との区別もなく、誰もかれも自由となり天の賜を授けられた。」「また、嫉妬、争闘、暴動、みだらな行い、虚言、人殺しおよび何らみだりがわしい行いがなかったから、まことに神が造りたもうたすべての民の中でこの民ほど幸福な民があるはずがなかった」(Ⅳニーフエイ3, 16)

現代に、教会は、社会悪をいやすものは教会のプログラムとそこで教えられる原則の中に存在すると宣言している。人類に対する関心が欠けているのではなく、むしろ高い関心を寄せるものである。次の言葉に示される福音の精神に注意しなさい。

「汝ら、人の値は神の前に大いなることを憶えよ。見よ、そは汝らの贖い主なる主は肉体にて死を受けられたらばなり。これを以て彼はすべての人々の悔い改めて彼に来らんために、すべての人々の苦を受けたり。彼はすべての人々悔い改むるならば彼に連れ行かんために、死人の中より再びよみがえれり。而して、悔い改むる人を見て彼の喜びは如何に大いなるか。これを以て、汝らは今の世の人々に悔い改めを叫ばんために召さるるなり。而して汝らもし生涯今の世の人々に向いて悔改めを叫ぶことに力を尽し、唯一人の人たりともわれに導かば、わが御父の国に於て彼と共に汝らの喜び如何ばかりぞや。さて、わが御父の国にわれの許に導きたる唯一人の人につきて汝らの喜び大いならば、汝らもし多くの人を導き来

らばその喜びは果して如何ばかりぞや」(教義と聖約18：10-16)

教会は財産奉獻、共同制度、什分の一、断食献金、福祉計画などのさまざまな経済活動により、教会員の物的援助を行っている。信仰厚く勤勉な教会員は、飢えや欠乏から必ず守られるのである。

教会外の人々への食物や衣料の援助も、行なわれていないわけではない。教会は地震や火事や洪水の被災者には、率先して救援を行なってきた。その援助は表だって発表はしないが、相当な量であり、被災した人々に大きな助けとなってきた。これはだれにも受け入れられるこの世的な援助である。しかし、あなたが、ある人に、神と人に対する態度を変える影響を及ぼすことができないならば、その人を永久に助けることはできないのである。

教会はまず個人のことを考え、人の内なる思い、自己尊重の心に関心を向けるものである。教会は単に人々をキリストに改宗させるだけではない。教会には信念を実行に移すプログラムがあり、まず改宗した人自身に変化が起こり、それから新しく見出したその生き方を他の人々に伝えることに、力と熱意を注ぐのである。

人生の喜びを奪われている人々や不正な社会の犠牲になっている人々、病人やしいたげられている人々に対して、教会内に関心は存在する。しかし、いやしの業は1つであり、それが全人類に説き伝えられているのである。そのいやしは、イエスのもとに来さえすれば全人類だれにでも与えられる。援助の手を伸べることを真剣に考えているあの青年は、人生を生きるにあたって最も価値あるものは何であるかを知りたいと願ったジョン・ホイットマーに対する救いを、主のみ言葉を、もう一度読んでほしい。

「さて見よ、われ今汝に告ぐ、すなわち汝にとりて最も価値あることは、汝今の代の人々に悔改めを宣べて人々をわれに導き、以て彼らと共に父の御国に休まんことなり。」(教義と聖約15：6)



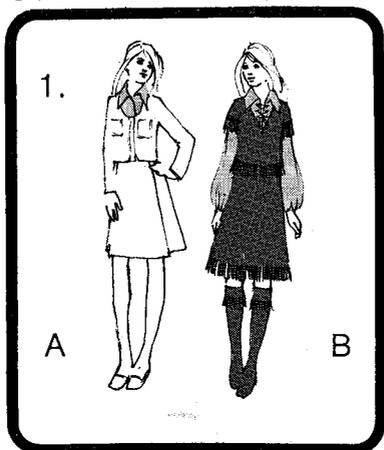
流行と信仰

ベギー・ホーキンス

—女性のためのテストクイズ—

おもしろい買物にでかけましょう。なんでも好きな物を買って下さい。さあどうぞ。

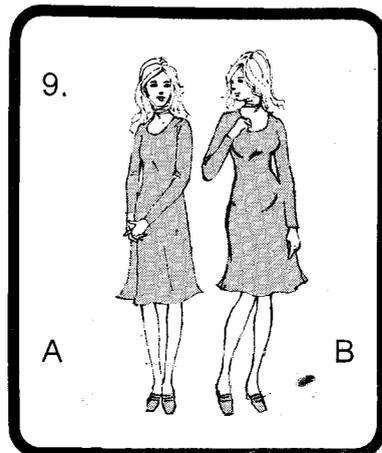
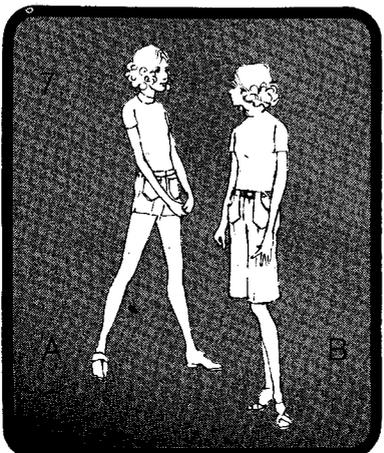
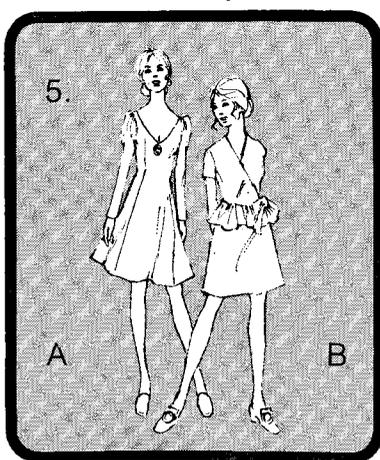
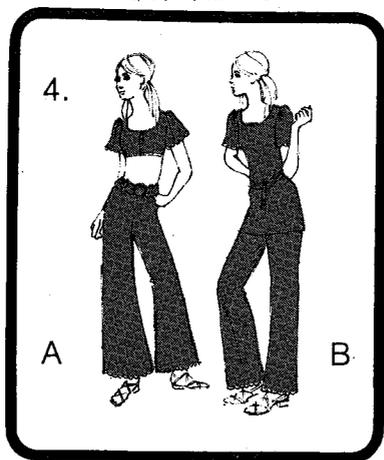
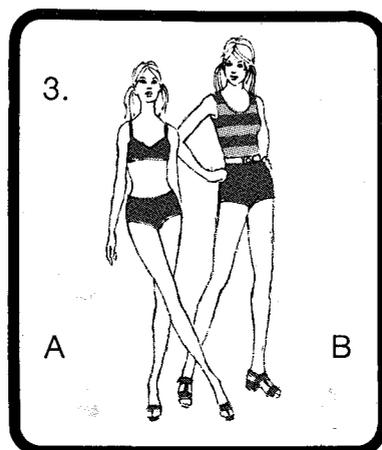
(どちらか片方を選んで下さい)



教会に出かける服



スポーツ行事の服



うまく上手に買物できたかどうか考える前に、教会の3人の大管長、予言者が、服装や装身具やファッションや慎み深さについて語ったことを読んでみましょう。これは第2代大管長ブリガム・ヤングが服装について語った言葉です。

「イスラエルの娘たちは、正しくな

「自分自身の型という
ものをつくり、外部
の影響に左右されずに
あなた方の心を喜ばす
服装をなさい。」

ブリガム・ヤング



い汚れた者の真似をせずに、自分たちはどんな服装をすべきかを理解しなくてはならない。

自分自身の型というものをつくり、外部の影響に左右されずに、あなた方の心を喜ばす服装をなさい。そして帽子やボンネットで覆いなさい。

私はびったり体についた衣服を見ること、女性の形を目にすることを恥ずかしく思う。……

もし私が女性で、洋服を作る布を持っていたとしたら、私は自分を小ぎれいに美しく包むように裁断するであろう。それが流行であろうとなかろうと慣習がやがてそれを美しくするであろう。……

主は啓示の中で我々に、衣服を質素にするよう教えておられる。『女の着る衣服はすべて質素ならしめ、而してその美しさは女の手工に成る美しさならしめよ』(教義と聖約 42:40) 主は我々に、『シルクやサテンのリボンや美しいピロードの布を作ってはなら

ない』とは決して言っておられない。しかし、『あなた方の着る衣服を造りなさい』と言っておられるのである。もしそうしなければ、だんだんにそのような衣服を手に入れることができなくなっていくことに気づくであろう。

一方私は申し上げる。婦人たちは、もし我々があなた方に服を少し短かくするよう言ったとしても、とっぴなことをして、長くつ下の上が見えるほどに短かくしたりしないように、服は靴の一番上までの長さにおろし、足の運びに邪魔にならず、泥で汚れないように、そして体を露出しないようにしなさい。服装をこざっぱりとみめよくし厳密な意味で純潔にあなたを導くものとしなさい。」(ブリガム・ヤング説教集 P.214—16)

次は、第6代大管長ジョセフ・F・スミスのもとに教会の各補助組織が出したある手紙への解答です。

「解答の最初の部分は神殿に入ったことのある姉妹たちにあてはまる。そのような姉妹たちは権威ある人々から特別な教えを受けたのであるから、適切な衣服を身につける義務を知っている。

この解答の最後の文は、神殿に入ったことがなく、その多くは服装に関して何の制限も受けていないと考えている少女や婦人たちにあてはまる。彼女らは思慮がなく、時世の流行に飛びつく。多くの者たちは、イブニング・パーティーの時に袖のないガウンや極端に下までカットした胸衣や、短いスカートをもとめて、真実慎みある男性を当惑させる。そのようなガウンを着ることはある人々の間で良いと思われているかもしれないが、末日聖徒の娘たちがそのように装うことは似つかわしくない。

イブニング・ドレスの中にも、美しく、着る人をひきかたて、しかも人の目に快くうつるものがある。それは肩と腕の上部をおおい、丸かVの慎みある衿ぐりで、スカートは極端に短くない

ドレスである。非常に薄い生地はそれ自体美しくとも、下に体をよくおおう下着をつけなければ、快いものではない。

不似合いな町着を着ている人をしばしばみかける。極端に短かいスカートや低くカットされたV衿のブラウスなどは、着る者の低級な好みや慎みのなさをよく示すものである。ジョーゼット・クレープなどの透ける素材でできたブラウスは、それにあった下着をつけなければ形がくずれてしまうと、服装専門家は考えている。

どの社会にあっても服装の型を決定するのに大きな影響を及ぼす仕立屋や裁縫屋の協力がなければ、それらのことについて望ましい結果を得るのはむずかしい。そのため、必要な進展を見るために彼らの援助を仰がねばならない。

若い女性のうちの多くが、そのような服装が魅力的であるとの誤った考えのもとに、極端な服装を取り入れるのは、驚いたことである。世の中の立派な男性は、慎みある服装の女性を讚美するものである。1916年6月大会のY L M I A役員会で、ジョセフ・F・スミス大管長は次のような発表をした。

「私は、この町および世界中で、立派な慎みある男性の中には、あからさまな服装を衆目にさらして町を歩く女性よりも、つつましかでこぎれいな体を包む服装をした女性を選ばない者は、1人としていないと考える。私はこれを私の信念として申し上げる。私はある程度、いくぶんかは、男性たちを自分で判断するのである。

どこにあっても思慮ある男女は、服装についての事柄に多大の考慮を払う。まことの慎み深さの理想は今や、再びよみがえってきた。最近ニューヨーク市で開かれた女性の会合では、服装が議題の1つにとりあげられた。そのような会合では、次に例をあげるような意見が述べられている。『女性のあなたは率先して造り主の前へ行き、着

ている服を審判していただくことができるでしょうか。あなたが身につけている深いVカットのブラウス、時代の流行のシンボルである短いスカートは、あなたの人格を表現していますか。今着ているガウンや帽子は、あなたの深い知性を示していますか。

……立派な婦人は自分の型を持つべき



です。(私たちは)みずばらしい身なりや風変わりな格好をすすめるのではなく、女性の衣服は着る人の人格を、その豊かな人格を表現するものであるべきだと主張するのです。』

末日聖徒の女性はこの運動のリーダーとなるべきである。特に役員は模範を示すべきである。各役員教師の双肩には、正しい理想に沿った服装を取り入れる責任が課せられているのである。各人は自問するとよい。私はこのことにつき、キリスト教会の一員として慎みある高度の標準に一致しているだろうか。」

デビッド・O・マッケイ大管長および副管長たちが声明した標準は、若人の力というパンフレットに載っています。

「慎みある服装の標準について、一言で言うことは困難である。ある人にとって慎み深く見える服も他の人にとって必ずしもそうではないことがあるので、厳密にきちんと決められるもの

ではない。

教会の標準では、若人が学校や聖餐会や教会の他の集会、ダンス、運動、キャンプにおいて、また家にあっても外にあってもふさわしい服装をするよう教えている。慎ましきは教会の若人を守るものであり、彼らが清く健全な生活を営むためにと、主の備えたもうた1つの方法である。

女性は自然の美しさと女性らしさをひきたてて装うべきである。衣服は体自体に注目を集めずに、快い魅力あるものでなくてはならない。たとえばスカートはほどよい長さにして、フィットし過ぎないようにすべきである。ドレスは衿が極端に深くカットされてはならない。ストラップのない服やスパゲッティー・ストラップの服はサンドレスにもイブニングドレスにも適当ではない。背中のあいた服やストラップのない服が似合う女性はまれなものである。そのようなスタイルはその人を見苦しく大きく見せて、ごつごつとした印象を与えることが多い。

家の外仕事をしたり、ハイキング、登山、キャンプ、運動をする時にスラックスをはくことはよいことである。しかしびったりしすぎてはならない。どんなスラックスでも、膝までとどくものであるとよい。無論、神殿に入ったことのある人は、ふさわしいスタイルの服装をするはずである。……家庭着のような服は公衆の前へは着て行かず、自分の家やアパート内でのみ用いるべきである。びったりしたセーターや体の線を目立たせる服は、末日聖徒が着るには適当ではない。

ビキニや腹部を出す水着など体を露骨に見せるものは着るべきではない。水着は泳ぐためのものであって、夏の日常着ではない。水泳の時のみ着るべきである。海岸やプールの行き帰りは、男女とも着換えるか、最低水着の上になんかををはおるべきである。」

以上の説教がなされた130年ほどの間に服装の流行はさまざまに変化して

きました。洋服の長さは何年もの間に変わりましたが、予言者が言わんとする精神は、いつの時も同じです。私たちの体は神の宮なのです。それは神聖で美しく、世間の人々の前にさらすべきものではありません。特別の時に着る服をもし毎日着たら、特別な気持はすぐに消えてしまうことでしょう。レコードや食べものに無駄なお金を使わず、節約して自転車や車を買うお金をためるのはなぜでしょうか。映画を見たりできる時間に一生懸命ピアノの練習をするのはなぜなのでしょう。桜がいつも満開でなく、いつも春ではないのはどうしてでしょうか。自分が働いてお金をためて買った車は、特別大切ではないでしょうか。ピアノに向かいリストのピアノ・コンチェルトを上手に弾けたら、うれしくはありませんか。若い時に遊んで過ごさなかったことをよかったと思わないでしょうか。もし毎日チェリーを食卓に出されたら、すぐにあきてしまいはしないでしょうか。そして、もし寒い冬がなかったら、春の意味はどのように違ってくるでしょうか。体も、それと同じように、季節まで待たなくては、靴の底ぼちの崇敬すら得がたいのです。主はあなたがそのことをよく理解し、いつか今も永世にもいっしょになる1人のため、清く純潔でいられるように、助けておられます。

最近、大管長会および十二使徒評議員会の承認を受けた女性の服装についての言葉を以下にあげましょう。

「……我々はいつも、会員たちが自分自身や親族、友人、交際している人々を当惑させることのないような標準を保って、慎みのある服装をするようにと勧めてきた。

我々は神殿に参入する際にはスラックスやミニスカートをはいたり、その他慎みのない服装をしないよう会員に勧めてきた。しかし教会の集会への出席にあたっては、この件に関し、勧告を与えることは賢明ではないし、その

必要もないと感じているが、人々が主の家に集っていること、従ってふさわしくふるまうべきであることを心に留めるようにと願っている。(「神権会報」1971年6月)

何センチであればよいとか、どんな水着ならばよいとか言うことは必要ないのです。すべてのことを命じられね

「…ある人にとって慎み深く見える服も他の人にとって必ずしもそうではないことがあるので、厳密にきちんと決められるものではない。」

デビッド・O・マッケイ 1967



ば何もできないとしたら、あなたは賢いしもべではありません。思いはかり主に尋ね、自分でそのことの精神を理解して下さい。その精神を知って、それが数センチ短いかどうかなどのささいなことで天国か地獄かに別れるというような誤解を捨てて下さい。このゲームで1点もとれなかったからといって、洋服全部をあきらめることはありません。創造力たくましく、古い服を変えて、新しいものを造り出して下さい。そうすれば「それが流行であろうとなかろうと、慣習がやがてそれを美しくすることでしょう。」

あなたに似合うならば、つつましかなミディやマキシも着て下さい。最高にすてきになって下さい。でも、あなたの着る衣服が、あなたの人格、外見、価値観を表わすことを忘れないように。

数年前カリフォルニアでファッション・コーディネーターをしていた時に、私は洋服の丈のことでさまざまな

感想を聞かされました。多くの人は長さをほめてくれ、母親は娘たちに同じようにしなさいと言うほどでしたが、どうして短くしないのかと聞く人たちもいました。私は「人気のあるのは、みんな思い思いの服装をすることです。」と説明しただけでした。私は自分の着ていた服の多くを自分で製作しましたが、流行と違ったものがたびたびでした。でも、それは私の個性の表現であり、私はそれを気持よく着ていました。

キリストの教会の会員であるあなたは、霊的価値から注意をそらす衣服を着たいと望むでしょうか。あなたの洋服は人々の注意をひくものでしょうか。あなたにとって服装は一番の重大事でしょうか。あなたは全部の時間を洋服作りに使ったり、全部のお金を洋服購入にあててはいませんか。

では、選択について少し学んだ今、ゲームの結果を自分の答えと合わせてみましょう。

絵

- | | | | |
|------|---|------|---|
| 1. ④ | B | 6. ④ | B |
| 2. A | ⑤ | 7. A | ⑥ |
| 3. A | ⑥ | 8. A | ⑥ |
| 4. A | ⑥ | 9. ④ | B |
| 5. A | ⑥ | | |

1, Bは教会には派手すぎます。みんな、心を話し手に向けたり礼拝の精神に集中したりせず、あなたに注目します。

2, Aの方が、生地やアクセサリーによって正式なダンスや家庭でのものになしにふさわしいものになります。

3, 「ビキニや腹部を出す水着など体を露骨に見せるものは着るべきではない」(大管長会, 1967年)

4, 5, 胸の部分があいていたり、V形にくってある服は、刺激的過ぎます。

6, 7, 「……短いスカートは、あなたの人格を表現していますか」(大

管長会, 1917年)

8, 9, 「私はぴったり体についた洋服を見ること、女性の形を目にするのを恥ずかしく思う」(ブリガム・ヤング)「ぴったりしたセーターや体の線を目だたせる服は、末日聖徒の着る服として適当ではない」(大管長会, 1967年)

もしもあなたがお金の全部を新しい洋服に使っているならば、このことを考えてみて下さい。キリストが来られる90年前、ニーファイ人は持物を貪乏人や病人に施していましたが、「かれらは高価な衣服で身を飾らなかったがその服装は見ても気持が良く小ざっぱりした服装であった」(アルマ1:27)と記されています。

また、主は彼らを非常に栄えさせましたが、8年のうちに、「教会の会員たちは次第に慢心を起した。それはかれらが勉めはげんで得た非常に多くの富と、精良な絹布、良いリネン、多くの家畜、金、銀、あるいはあらゆる貴重な品物などを持っていたからである。このようにしてかれらは非常に高価な衣服を身に飾るようになり、上に述べたような財貨を誇ってようやく高慢な心がついった。(アルマ4:6)こうして彼らは他の人をみくだすようになり、貪しい人々に背を向けるようになりました。

そのようなため、パウロは「女は適度に慎み深く身を飾るべきであって……金や真珠をつけたり、高価な着物を着たりしてはいけぬ。むしろ、良いわざをもって飾りとするのが、信仰を言いあらわしている女に似つかわしい」(Iテモテ2:9-10)と言い、「この世の有様は過ぎ去る」(Iコリント7:31)と述べています。

この記事の原案は、ユタ州立大学の
カレン・S・クリスチャンセン氏の博
士学位論文から取ったものである。

この記事は、教会の教義を教えるためではなく、読者にとって参考となり何らかの助けを与えるためのものである。

質 疑 応 答

解 答 バ ー 兄 弟

「学校の生態学のクラスで、人口過剰で、しかもひどく汚染された世界に、子供を3人以上も生む人は利己的だと激しく非難されました。私はそれに対してどのように答えたらよいのでしょうか」

そのことが利己的であるか否かを定める前に、関係した人たちの価値観や動機といったものを知らなくてはなりません。あなたは社会学や社会科学のクラスで、民族的優越感の思想（エスノセントリズム）という言葉について話しあったことがあると思います。エスノセントリズムとは、ある民族が自分たちの価値感こそが正しく妥当であり、他の価値観や方法は誤った悪いもので、利己的であると見ることです。

「子供を3人以上も生む人は利己的だ」という言葉は、エスノセントリズムの最も良い例になります。この言葉は、3人以上の子供を生みたい人はみな利己的であるということになりますし、きっと他のどんなことでも、たとえば、教師やクラスの過半数の人が考えても、自分がそう思わないからと言って否定することでしょう。

あなたのクラスメートの考え方をとれば利己的となるような例をいくつか見てみましょう。政府は、事故が少なくなるようにハイウェイ安全運動を提唱しています。医師は年老いた人たちの寿命を延ばそうと病氣と闘っています。看護婦は未熟児や虚弱児を成長させようと働いています。軍人は降参した敵を殺さず捕虜にします。ソーシャル・ワーカーはスラム街の衛生状態を改善して幼児死亡率を減少させようと努めています。

このようなことはみな、人間が大切なものであるということ、また人命の神聖さは過剰人口の問題よりも大きいことを物語っています。

もとの質問を考えると、以上に例としてあげた人

たちはみな、高度の価値観に支えられて、人口をそのままに保つかあるいは増す行為をしていることになり、利己的なわけです。

スチープン・クレインはそのような意味の詩を書いています。私の考えるように考えよ。……さもなくば君はヒキガエルだ」という言葉の返答に、「では、私はヒキガエルになろう」と言っています。人口過剰になることが一番の関心事であるエスノセントリズム信奉者に対して、それより大切なものを知っている人々は、自分にヒキガエルの張り札をすることです。それは違っていること、すなわち福音を基として真に価値あるものを知っていることの張り札です。

私は、「どのように答えたらよいのでしょうか」というあなたの質問に対して、簡単な答えがないことを残念に思います。わかりやすく言えば、あなたの価値観と彼らの価値観は違うということなのです。大部分の社会では、自由に自分の信じたいことを信じる権利が保障されています。あなたには人命の神聖さを信じる権利があるし、子供をすばらしいと感じ自分の家族を持ってから、それらの信念を行動に移す権利もあるのです。

そして、それと同様に、家族数を少なくとどめた人の子供を生みたくない人々も、その人たちの価値観に従ってことを行なう権利を持っています。

汚染された世界と人口とはまったく無関係であるというのが事実です。何十年間か、社会は汚染の問題を無視し、長い目で見れば多大の損失となる目先の利益ばかりを優先してきました。汚染を少なくしあるいは汚染の全くない社会を作るために必要な社会機構の変革を、社会が率先して行なうかどうかは、目に見える問題です。人口問題にその罪を着せるのは、逃げ口上でしかありません。汚染は人々がどのように生活するかによって生じてくるのであって、人口が多い少ないで起きる問題ではありません。

社会生態学が広まったおかげで、人口増に反対する人々も驚くほど容易に主張を変えてきています。人口増加を抑止できなければ餓死するしかないという主張が以前にあったことはあなたも覚えているでしょう。子供を少なくしなければ、欠乏を待つのみと言われたのでした。

そして、農業の「緑地改革」論で、地球は現人口の何倍もの人間を養い得ることが明らかにされたのち、飢餓論は下火になって、汚染と過密の問題が人々の口にのぼるようになったのです。

生活水準を高めるのが徳とみなされていた時代に家族のことを考えて、子供と豊かな物質のどちらを選択しようかと考える両親がいました。そのような

時代に、何が大切なのか、そしてどちらの選択が利己的な選択なのかを見定めることがなかなかできない人たちもいました。現在、その判断はずっと簡単になっています。いわゆる人口問題もしくは社会生態学の専門家たちは、それが同時に現存の人類のためになる選択であると言いながら、私たちに物質主義をすすめてきました。それは何という見えすいたごまかしでしょうか。

最適な人口がどれだけかということは、だれも知りません。最適という言葉を実しく定義するには、しっかりした価値基準を持たねばなりません。科学は、このような最適条件をはかり出す価値基準を提供できません。たとえばもしあなたが、大切なことはできるだけ餓死を防ぐことである。すなわち餓



死するよりは生まれて来ない方がましであると考えたとしたら、できるだけ大勢の人間が人生を体験すべきであるということを大切に考える時と、非常に違った最適人口が割り出されます。

また、あなたが最大多数の最大幸福を一番に置いて、「幸福」という言葉を定義づけるとしたら、また別の人口数が出て来るでしょう。

過剰人口についての話はみな、どれだけ人間が養われねばならないか、どのようにして養われるべきか、なぜ養われねばならないのかということにつながっています。しかしその問題の根本にある、何が大切かということについて話し合うこと、それについて詳しい話し合いがなされることはまれです。

ある人々は時々、人口増加に反対意見を持つ人の上手な言葉に惑わされて、その意見の根底をなす仮説や価値観が矛盾していることに気づかないでいます。過剰人口の問題は今日の問題であり、時勢に沿った問題の1つでもあります。それがどういう問題なのか、あるいは過密とか過疎とか最適とかを決め

るのに、どんなことを考慮すべきなのかなどの質問は、大抵の人が好意をもって聞いてくれます。

しかし、キリストに従うあなたにとって、状況はいくらか異なります。イエス・キリストの福音を構成する価値観は、人は何者であって、地上の生活は何のためにあるのかについてのキリストの教えから生まれたものです。その価値をいくつかとりあげてみましょう。福音は、人は永遠の存在であって、神の子供であると教えています。また、この人生は大切な勉学の時期で、しかもこの時期は人の全存在のほんの一時代に過ぎないということ、この地上に来た主な理由は肉体を得ることであることを教えています。肉体を受けてこの死すべき人生に伴うさまざまな機会を得ることは、永遠の報いに向かって各人が進歩するための重大な段階なのです。私たちは神の子供、永遠の民の一員として、この世はつかの間であり、外見上、人の限界と見られる死や始めと終わり、悲しみや苦しみなどは、必ずしもこの世ののちにも存在するわけではないことを知っています。

福音は、神の子供である人間は神が創造された他のどんな生き物よりも大切であると教えています。木や川、空気、荒地、地球、その他のものは、みな人のために創造されました。人がそれらのもののためにつくられたのではありませんでした。神は述べておられます。「これわが業にしてわが栄光、すなわち人に不死不滅と永遠の生命とをもちたらしめたり」（モーセ1：39参照）この言葉は、人がそれらの創造物を不敬に取り扱ってよいというわけではありません。反対に、あらゆる命あるものや感嘆すべき複雑巧妙な自然に深い畏敬の心を抱くことは、クリスチャン生活を証明する一要素と言えるでしょう。しかし、私たちが最優先すべきものは明白です。人間こそ、木や森や公園や、全世界の富をもってしてもかなわない価値あるものなのです。

それらの価値観に照らせば、「墮胎」という言葉は耳にするだけで寒気がします。地球が私たちのために存在するのです。決してその反対ではありません。地球対人間という立場から見るとはならず人間のための地球という観点で見なくてはなりません。優先順位ははっきりしています。地上における人生の恵みは、できるだけ大勢の同胞に与えられねばならないのです。地上の生活が学ぶ時代であるとすれば、私たちは、学んで得られる益が、天父が地上に送りたいと思っておられるすべての人間に与えられるよう備えようではありませんか。そして、学んで得られるものは、土地と人間の比率やすべての家族が自分の土地を持つなどということによるのではないことを理解しましょう。家や冷蔵庫や車は、地上でどんな経験をするかということに必要ではない

のです。

人は偶然にできた宇宙で偶然に何かの生物から生じたと考える人や、人生はつかの間の汚濁に満ちたもので、死後は無になってしまうと考える人にとっては、おそらく自分の子孫の世界をできるだけ楽しく苦勞のないものにしたいということが重大事なのでしょう。そのように考えるなら、人間が多かろうが少なかろうが、たとえ人間がいなかろうが、大した問題ではなく、きっと、少なければ少ないほどよいと言うことでしょう。

しかしもし私たちが、人は神の子孫で、地球は人間のために造られたものであり、地上の生涯は、肉体を得て他の人々と共に生活することであると信じるならば、いわゆる人生の問題は、人生に伴うチャレンジに変わります。

結局あなたはクラスメートや教師たちがあなたの価値観を受け入れるか尊重してくれなければ、人口問題や生態学の質問に対して彼らに満足のいく答えができないことを知っていないではありません。それは、人類というものに対するあなたの見解が彼らと違っているから、あなたの解釈と彼らの解釈が違うからにはかぎりません。本当に、その相違は深く根本的なものなのです。話し合いは、身近な友人と人口問題についての見解よりも「人は何で、どのようになり得るのか」といった問題から始めるべきではないかと思えます。

しかし、人間社会の遭遇している問題は本質的に人口とは関係がなく、社会組織の腐敗や無能性に帰因することを知っておかなければなりません。専門家の中には、子供を生まない方が、成人男女の生き方を変えさせるより容易だということで、違った主張をする人がいたかもしれません。

私たちが環境汚染は重大な問題であると考えています。しかし、それは人口数によって生じるのではなく、悪習慣にならされ、現在の行為の将来生ずる結果に注意を払わない、貧弱な社会が生み出すものです。私たちは、人類全体に正しい原則を教えることができたなら、今想像することもできないような立派な人間社会ができあがるに違いないと信じています。

終わりにあたって、即答を2、3あげましょう。土地空間を憂慮する人たちには、地球の土地のほとんどの部分はまだ開拓されていないか、ごく少数の人間しか住んでいない状態であることを指摘して下さい。私たちは互いに殺しあうことに力を注ぐことをやめて、地上の残っている部分をいかに開拓したらよいかを研究すべきです。それでも土地空間が足りず、人口問題についてなされる企画が、無限に増加する人口を世界の辺地に追いやるものであるとの印

象を与えるならば、海上都市や海底都市、空中都市について論じればよいでしょう。この10年間に、それまでの空想科学小説は現実となってきましたから、上にあげたようなこともそう遠い話ではないでしょう。人間がどんな生活手段を利用できるかということに関して、人類はあまりにも既成概念にとらわれすぎます。質問者が地球は狭すぎると言うならば、宇宙に移住することができるし、宇宙を征服するという仕事に手をつける前に、まだまだ人口過疎地帯があると指摘すればよいでしょう。つまり、空間は問題とならないのです。だれでもその意見をひっこめることになるはずです。英知、想像力、勤勉が、目下必要とされるものです。

次に食糧について心配している人たちには、知識に欠けたり、生産できる状態にないために、未開拓の土地があることや、使える土地をもっと有益に使うことを提唱して下さい。水栽培法の未開発分野、海の開発、化学研究所での食糧生産なども考えて下さい。また食糧の流通におけるむだや非効率性も考慮して下さい。食糧は問題でなくなります。取引や国の政策が問題なのです。

もし食糧も空間も問題でなくなるなら、何が問題なのでしょう。利用できる荒地がまだ足りないというのが問題でしょうか。では、十分な地域が利用できるようなやり方で土地空間を組織計画して下さい。それはできます。最後に、町からキャンプやピクニックにでかける場所を確保することと、子供を大勢持つこととのどちらかの選択になるとしたら、私は子供の方を選びます。

どうか、エスノセントリズムということについてよく知っておいて下さい。それがどういうことなのかを認識し、それにどう対処していくべきかを学んで下さい。キリストの従者であることから生じる事態をまっすぐ見つめて下さい。救い主は弟子たちに迫害を覚悟せよと警告されました。小家族の世にあって大家族主義を奉じる私たちに「利己的」というレッテルを張ることは、今日の聖徒たちが耐えねばならぬ迫害の1つであるかもしれません。

終りにあたって、あなたはそのレッテルが根本的な価値観の違いからつけられたということをはっきり心に覚えておかねばなりません。友人と、価値観の一致が不可能であることがわかって、心を乱されないで下さい。あなたは末日聖徒として、世の中のある人々と異っているのです。ですから、人間の問題にどう対処するかについて相違があることは、むしろ当然なのです。

ハワード・M・バー
ワシントン州立大学
社会学助教授



小説

帰郷

メアリー・エク・ノールズ

ウォートン駅にはいったバスの窓から、ジョー・アンダーソンは外を眺め、祖母の姿を捜した。おばのマーゴはジョーにこう言ったのだった。「おまえのことでは10年もがまんしてきた。おまえはもう16だし、ベンとうまくやっていけないんだから、アンダーソンの家の者が引取りに来なきゃいけないんだ。」

ベン・トラカスターはおばであるマーゴの新しい夫であった。彼は、初めからジョーを追い出す口実を捜しているようだった。ジョーが髪を伸ばし、ふき飾りのついたジャケットを着、ジップ・サベージと近づき始めたのは、ベ

ンが「長髪族」をあからさまに非難したあとだった。ベンが「出て行け！」と言ったのもこの時である。

だからジョーは今ウォートンにいる父親の母と暮らすつもりだった。ジョーは空想にふけた。祖母は自分を見て喜ぶだろう。そして生活も父母が死んだ6歳の時以前のように安全なものになるだろう。

バスが急停止した。彼はカーキ色のナップサックを取りあげ、バスを降りた。

祖母は彼を歓迎してくれないだろう。10年もの間、彼が生きているかどうかさえ知りもしなかった祖母である。彼

のブロンドの長髪を見たときに異和感を覚えることであろう。彼は祖母を覚えているだろうか。祖母はもうかなりの年のはずである。彼の記憶にある祖母は、背が高く茶色の目をしていて。祖母にキスをされると、おじけた気が消えたものだった。

彼の青い目は群衆の中に祖母をさがしたが、歓迎の笑みは見あたらなかった。不安が彼の胸をよぎった。「なぜ、自分は生まれたのだろうか。」「いったい人生って何なのだろう。」彼は自問した。彼は祖母にとっても良い訪問者ではなかった。だが、ジップ・サベージが教えてくれた住所はそこだけだったので、祖母の家へ行くしかなかったのである。ジップが来たら、彼らはある大きな町へ連れてってもらい、そこから他国へ出発するつもりだった。

ジョーは、ジップを恐ろしく思うことがしばしばあり、本能的にジップから離れたいと感じてはいたが、おばのマーゴが結婚してしまったため、相談相手はジップ1人きりだったのである。

「ジョセフ、」自分の名を呼ぶ声に振り向くと、そこには背の低い、暖かな茶色の目をした白髪の婦人がいた。急にジョセフは父が「父さんの母親は父さんたちに厳しく命令したものだよ。」と言っていたのを思い出した。このか弱く小さな婦人が、人に命令などどうしてできようか。彼女は背が高いどころではなかった。彼は祖母に最後に会った時は、小さな少年の時だったことを思い出した。「こんにちわ、おばあちゃん。」

「おまえはひどく背が伸びたね。でも私は、おまえがどこにいても、ちゃんとわかるよ。かがんでおくれ。キスできるよ。」

愛情のこもったキスだった。ジョセフの心に一筋の希望の光がともった。その時、彼はいつかおばのマーゴが「アンダーソンのうちは、2枚舌の偽善者だよ」と言っていたことを思い起こした。

「ジョセフ、おまえのかばんはどこ？」

「これきりなんです。トランクはあとで届きます。」

「じゃ、家まで歩こう。4丁位しかないし、いいお天気だからね。」

2人が角を曲がると、1人の男がぶつかってきた。「すみません。」男はそう言ってジョーを見、笑った、「どうもすみません、御婦人たち。」

ジョーはその男をなぐってやりたいと思った。町を歩いていると、彼の耳に「あれは男か女かどちらかね。あの長いカールの髪を見てごらん。」ときさやく声が聞こえてきた。何という田舎だ！彼はジップが急いで来れば良いと思った。

ジョセフは祖母を見おろした。祖母の背骨は堅そうに見えた。家に向かっている間、祖母はあちこち、興味のあるような裁判所や公園などの場所を説明し始めた。しかし、ジョセフは、彼女の説明もうわの空に、新鮮な空気を深く吸い込み、遠くにそびえる、雄大な山々を見上げるのだっ

た。

「新しい高校はこの町の向こう側にあるんだよ。いとこのエドワードといっしょに通うことになるの。みんなは日曜の夕食時に、あなたに会いに来ます。あら、こんにちわピーク、この子はジャスティンの息子です。」

2人はピーク薬店と看板の出ている店の前で立ち止まった。白髪の老人がほほえんだ。「そうか、君がジャスティンの息子か。君の父さんはうちの配達をしてたんだ。君を見ると父さんを思い出すなあ。おばあさんと住むのかい。今、ちょうど男の子をひとりほしいところなんだがな。ここで働いてくれないか。」

「はい、そうしたいです」主人はふっとジョセフのみなりに目をとめた。おそらく、この子は髪の毛を少しは短かくしてくれるだろう。」

「よかった。じゃあ、月曜日においで。その時いろいろ説明するよ。」

「ありがとうございます。」ジョーの足どりは元気になった。

「びっくりしたな、おばあちゃん、彼はほくのことも何も知らないというのに。」

「ピークはアンダーソン家の人たちを知っているのよ、正直者で評判だからね。」

彼らは大きな赤レンガの家の前で立ち止まった。昔の記憶が少しずつよみがえってきた。ずっと昔に父や母とこの家に来たことがあった。思い出に心をときめかせていると



1台の車が少年たちを大勢のせて通り過ぎていった。

「やーい、ブロンド美人、デートはどうだい！」

ジョーはまわりを見回した。「おばあちゃん、ほく髪の毛を切ろうとは思いません。何と言われても。」

「私が髪を切ってほしいと言ったかい。ジョセフや。」

「いいえ。」ジョセフは足を踏みかえた。

「おまえがそうしたいなら、そうすればいい。その権利があるからね。でも……」祖母は髪をかきあげて言った。

「立派なひたいを隠すのは惜しいね。さあ、中へ入って食事しましょう。」

おいしそうな食べ物のおいが彼を待っていた。彼のおなかは、空腹で今にも背中とくっつきそうだった。

「父さんが使っていた寝室を使いなさい。こっちだよ。」

それは大きな日当りの良い部屋で、勉強机とランプがあった。「手でも洗ってね。10分すればお昼も用意できるから。」

ジョセフは壁にかかっているペナントを見つめた。ワートン高校。父は学校を中退したのだった。そこは父の部屋だった。急に彼は暖かい父の腕に包まれ、「息子、かわいい息子や」という声を聞くような気がした。

「父さん」、彼はつぶやいてみた。涙が両の頬をつたわった。ジョセフは乱暴に涙をぬぐうと、浴室の鏡の前に立った。「ひゃあー」、彼は野蛮人のように見えた。前髪をかきあげてみると、実にりっぱなひたいである。

「用意ができましたよ、ジョセフ。」祖母が呼んだ。

テーブルには食事が整っていた。彼がハムに手を伸ばそうとすると、祖母がその手を止めた。「ジョセフ、おまえが祝福をして下さいな。」

彼は祝福ということを知らなかった。しかし祖母は頭をさげて、待っている。彼は父が食物を祝福していたことを思い出して、その場を救われた。「天の父なる神さま、私たちはこの食物を感謝致します。」記憶をたどって言葉が出てきた。「食物が栄養となって、体を強くし、あなたのみこころを行なう力を与えてくれますように、アーメン。」

「父さんがしていたと同じ祈りね。ジョセフや、お料理してくれる人がいることも、とてもありがたいことです。」

彼は祖母に愛されていることを知った。しかし、これまで手紙をくれたことがなかったのはなぜなのだろうか？彼は思う存分食べ、満腹した。小さな祖母は何と少食なのか。

食事を終えた祖母が言った。「ジョセフや、ちょっと休ませておくれ。それからあとかたづけをしたら、アルバムを見ましよう。」

彼女が自室にひきあげてから、ジョーはゆっくりと部屋を歩き始めた。彼は散歩に行きたくなった。ドアをあけたが、思い出したように立ち止まると、祖母に行先を告げに引き返した。彼女の寝室のドアの前で、彼はそっと立ち止まった。毛糸の掛けぶとんにくるまっている祖母が、ごく小さな小山のように見えた。ジョセフの心に、急に祖母を守ってやりたい思いがこみあげてきた。

彼は玄関前の長いポーチまで出たが、芝生が長くなっているのに気づいた。彼は芝生を刈ろうとせず、台所に引き返した。そしてテーブルの皿を見わたし、にっこり笑った。皿を洗って祖母を驚かせてやろうと考えたのである。彼は音をたてないように気をつけて、全部の皿を洗いあげた。

「まあ、ジョセフ、お皿を洗ってくれたの！」祖母が廊下から声をかけて言った。「おまえは父さんのようだね。」

ジョセフは、彼女のために良いことをしたいと感じた。

「おばあさん、ぼく薬屋で働いたお金をためて車を買います。そして旅行しましょう。いろんなところに。」その時、彼はジップのこどをすっかり忘れていた。

「でも、ジョセフ、車はあるのよ。何年も使わなかったけれど、私が乗れないだけでね。おまえの父さんは若い時にそれでタクシーをしたことがあるの。」

「古い車があるんですか。見せてくれますか。」

「どうぞ。ガレージの中のレンガの上よ。新しかった時1942年型でとってもエレガントなバック・スタイルでね。」

ジョーがシートを取り払うと、堂々としたセダンが現われた。「トランクにあるタイヤは新しいんですね。」

「そうよ、あなたのおじいさんが車に取りつけるつもりでいて、病気になってしまったものだから。」

「あした動かしていいですか。」

「ジョセフ、おまえに車をあげるよ。おじいさんも喜ぶでしょう。」

ジョセフは興奮して、その晩はろくに眠れなかった。翌朝彼はブーンという音で目がさめた。祖母が古ぼけた重い芝刈機を動かしていた。「おばあちゃん、やめて下さい。重すぎるから……。」彼女の目はきらりと光った。「つまり、ぼくは芝刈りが好きなんです。芝を刈ってから車に乗ります。」

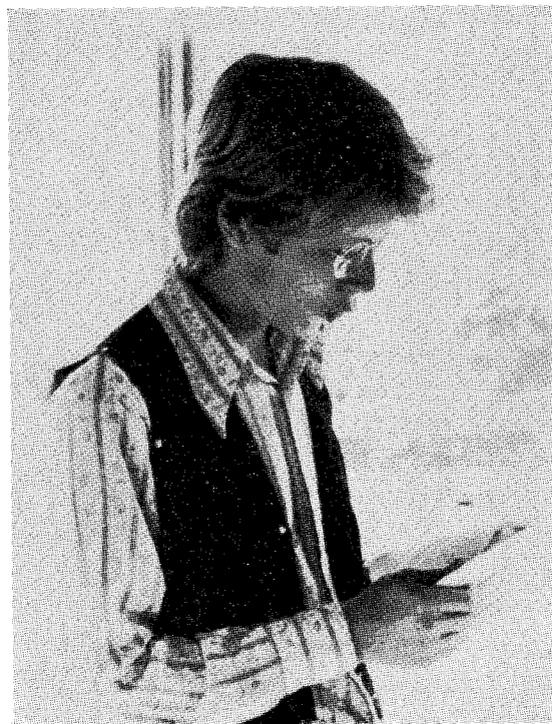
彼は朝食もそこそこに終え、断固として、しかしやさしく、祖母から芝刈機をとりあげた。庭を一直線に刈ると、長い髪が目につれてきた。「おばあちゃん、ぼくの髪の毛、少し切って下さいませんか。」

「いいなら、そうしますよ。」

ジョセフが鏡の前にすわると、祖母は「よく父さんの髪を刈ったものだよ」と言った。

「ぼく、父さんに似てますか。」ジョセフは尋ねた。

「そっくりだよ。ジョセフは父さんを覚えていないのかい。」



「ぼくの手を握った父さんの手の感じは覚えています。父さんと母さんがいっしょに笑っていたのも覚えています。」またジョセフはわからなくなった。おばのマーゴからは父と母がうまくいっていなかったと聞かされていたからである。

おばのマーゴは、「父さんは私たちを引き離したの。あなたの父さんは母さんと私が仲良くなるのがいやだったのよ。車のスピードをあげて母さんを死なせたんだわ」と言っていたのである。

「もう、いいんです。おばあちゃん。」悲しい思い出はもうたくさんという気持だった。

彼は鏡に映る自分が気に入った。

彼は一日中車の修理にかかりきりで、急いで夕食をとったのちに、店へガソリンとスパークプラグを買いにでかけた。そして言った、「おばあちゃん、手伝ってもらわなくちゃならないんです。スパークを調整して下さい……」

「ああ、やり方知ってますよ。」祖母は頬をピンクに染め、うれしそうに見えた。

古い車が生き生きと見違えるように生まれ変わったのは10時をまわる頃だった。

「さあ、終わった、これで動きますよ。おばあちゃん」

「よくやったね、ジョセフ。すてきじゃないかい。」

「あした一番に、おばあちゃんをドライブに連れて行ってあげますね。」

「たぶん、明日の夜、聖餐会のあとだね。午後はみんなが夕食に来ることになっているから。」

ジョセフが自分の部屋に戻ると、白いシャツと黒いズボンが置いてあった。

「サイズが合うといいんだがねえ。」

「ぼく、今着ているのが好きなんです。」

「色が派手でしょ。主の宮にはちょっと不似合いだと思うでしょう。そうじゃない？」

「ええ、そうですね。」彼はこんなかきこまった服を着た姿を、ジップには見せられないと思った。そしてどういうものか、ジップにそう会いたいとは思わなかった。彼はまたわからなくなった。

日曜学校で、ジョセフは人々が「高きにさかえて」を歌うのを静かに聞いていた。「わが豊かつてはみそばに住みて……深きみむねにてわれ世にくだし……仰せのみわざみな成しとげしとき、受け入れみそばに住ませたまえ。」

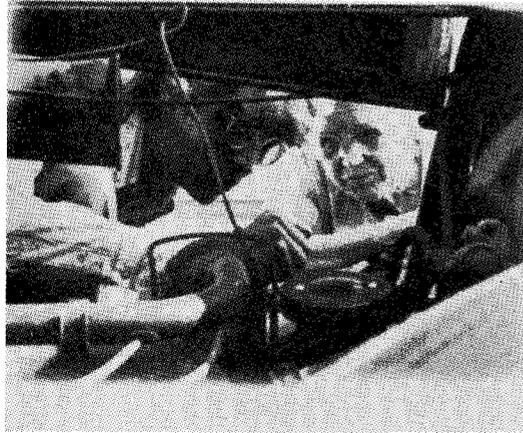
彼の心はいっぱいになってきた。そこに、彼の疑問に対する答えがあった。自分は何なのだろうか。なぜここに生きているのか。死んだら、そのあとはどうなるのか。

1時に、父の親族が集まった。彼は長く会ったことのない人々を前にして、すみの方に離れていたが、みんなは暖かく彼のまわりに集まってきた。彼はみんなの名前を覚えようとしたが、無理だった。祖母が言った。「この人がいとこのエドワード。同じ年よ。」

「こんにちわ、ジョー。」エドワードは彼の手を握って、

にこっと笑った。エドワードは背が高く、黒っぽい髪の毛で、長い首にきりっとした髪がよくといてあった。「これから、いろんなことをいっしょにするようになるね。」

「楽しみにしてるよ。」ジョセフはいとこに親しみを覚えた。食事がすんでから、ジョセフはいとこに「外へ出よう。みせたいものがあるんだ」と言い、ガレージに連れて行って車を見せた。



「おばあちゃんがちゃんとしまっておいてくれたんだ。ドライブしていいって言ってたから、ちょっと待ってて。キーをとってくる。」

彼が急いで家へ戻ると、何人もの人が口々に「その年で大変なことね……」、「苦労だよ……」、「私たちの言うことを聞いた方がいい……」と言っているのが耳に入った。

彼らはジョセフのことを話していたのだった。おばのマーゴの言ったことは本当だった。みんなは偽善者だ。彼はきびすを返してガレージに戻った。

「キー、持ってきた？」エドワードが聞いた。

「今、ドライブしたくなかったんだ。」ジョセフはうしろを向いて歩き出した。

「待って、ぼくも行くよ。」

「ぼく、1人きりでいたいんだ。」

ジョセフが公園のベンチに腰かけると、涙があふれてきた。あんなに幸せだと思っていたのに。それなのに今は。彼は暗くなってから家に帰った。祖母が門のところで待っていた。「ジョセフどうしていなくなったの？」

「そのこと、話したくないです。」

「そう、それなら……」

彼は、その夜、父母を捜して霧の中を歩いている夢を見た。物陰のガサガサする音で目をさましたが、見るとジップが月明かりの中に立っていた。長い髪が肩まで垂れていた。

「ジップ、来たのか？」

「もちさ。行くなって言ってたろ。おい、2丁ほどの所に羽振りの良さそうな薬屋があるぞ。やるか。大分金になるぜ。」ピーク薬店のことだった。月曜からジョセフが働くはずなの。

「これほど、やりやすい町はないぜ。」ジップは、先々のことを考えてはくはく顔だった。アンダーソン一族はジョセフのことをどうとも思っていないが、ジョセフは父の名前に傷をつけることはしまいと思っていた。

「さあ、来いよ。明るいな。」

彼は部屋をみまわし、窓の戸を少しずらした。しかし、窓によじ登ろうとした彼は、強い手でえりをわしづかみにされ、ひきずりおろされてしまった。月明かりに祖母が見えた。

「真夜中に外へ抜け出すような孫を持った覚えはないよ。ジップさん、孫に会いたいなら、ちゃんとした時間に堂々と玄関からはいっておいで。」

「昔の仲間にか冷たい顔か、ジョー。」ジップの声は荒々しかった。

「おばあちゃんなんだ、ジップ。」

「そいつもおれにか、関係なしさ。そうだろ。」そう言ったジップの顔が初めて見えた。みにくくゆがんだ顔だった。

「おばあちゃんの言うことを聞けよ、ジップ。やめた方がいい。」

ジップは身をひる返して走り去った。

「さあ、私の部屋へ来なさい。歩いて！」

ジョーはその時、祖母はこうして背の高い息子たちに命合したのだと合点がいった。「歩いて！」と言われジョセフは歩き出した。

祖母の寝室で、彼女はジョセフに向きあって腰かけた。

「さあ、おまえはどうして外に出ようとしたの？」

「どうしてぼくが外へ出るって、わかったんですか。」

「私は6人もの子を育てたから、ちゃんとわかるんだよ。私は……」祖母は突然ゆらっと前にのめった。「青いピンの薬を……。2つ……」息も絶えだえにもがきながら祖母はやっとのことでベッドに横になった。

彼は薬を手渡した。祖母は非常に静かになった。彼は、「どうか、おばあちゃんが死にませんように。ぼくはおばあちゃんのそばにもっといますから……」と祈った。

数分して祖母は目をあけた。「前ほどに若かったらねえ。でも、おまえ、私が発作を起こしたなんて、だれにも言っちゃだめよ。今日もみんなして私に注文つけたんだから。『この家はおまえに重荷だ。もう80を過ぎてるんだから』って。みんなは、大事にしてる花を見捨てて、アパートにとじこもらそうとするんだよ。」

それが彼の聞いた言葉だったのである。

「私はみんなにね、ジョセフが来てくれたから大丈夫だって言ったんだよ。おまえがいるものね。そうじゃないかい？」

音信のなかったさびしい年月を思い起こしたジョセフは言った。「おばあちゃん、前はぼくのこといらない方が良かったんでしょ。」

「ええっ、何だって？」

「ぼくなんていない方がよかったんでしょ。」ジョセフの声は震えていた。

「まあジョセフ、かわいいジョセフや。私は手紙を書きましたよ。プレゼントも送ったし。けれど、みんな戻ってきたんです。お父さんお母さんが亡くなった時、私はあなたを引き取りに行ったけれど、あなたのおばさんが生前世話をするように頼まれていたというんで、私はもっていてあなたのために争いたかったけれど、何しろおじいさんの病気がひどく悪くてね。帰らなくちゃならなかったんだよ。おばさんの行方がわからなくなったでしょう。住所も知らせないで引越したものだから。」

ジョーは、何回も引越したことを思い出した。

「マーゴが電話で、おまえを私のところによこすと言ってきた時には、私、うれしくて涙が出たんだよ。」

「でも、どうしてマーゴおばさんはぼくに嘘をついたんですか。おばさんは父が母を死なせたと言っていました。」

「ジョセフ、よくお聞き。悲しみは人を変にします。母さんとおばさんはふたごだったのよ。母さんが教会に入って結婚した時、マーゴは教会や父さんを悪く言いました。彼女は厳しい人になってしまっただけ。事故は父さんのせいじゃありませんよ。道が凍っていて、ハンドルの自由がきかなかったの。でもマーゴを責めちゃいけませんよ。彼女をかわいそうに思ってお祈りしてあげなさい。今まで通りに接してね。」

「それでぼくを呼んだんですか。ぼくに来てほしかったんですね。」

「ええ、そうよ。そのとおり。ジョセフは私のところに来て、ここからエドワードといっしょに学校に通うんですよ。」

「いえ、ぼくにはできない。ぼくはよそ者だし、遅すぎます。」

「遅くなんてありません。ジョセフ、おまえは勉強してみんなに追いつくんです。エドワードの家族がみんなして手伝ってくれます。もう一度まともになるチャンスです。」

祖母は片手をあげた。「お聞きよ、ジョセフ。」

ピーク薬店の方角からパトカーのサイレンが聞こえてきた。ジップは泥棒はきわどい仕事だとよく言っていた。ジョセフは目を閉じて、感謝の祈りをした。もう少しで自分も悲惨な経験をするところだったのである。

「ジョセフ、わきにおすわり。今しばらく。」

「はい、おばあちゃん。」

彼はきちんと椅子に腰をかけた。彼は今やこの家の住人だった。祖母が眠ると、彼は静かにふとんをかけた。そして、自分の部屋に帰り、ベッドに入った。しかし、いつ祖母が呼んでもわかるように、ドアを少しあけておいた。眠りにおちるまでのおだやかなひととときに、彼は再び父親の霊を身近に感じた。彼はほほえみながらささやいた。「これでいいんです。父さん。ぼくは今、家に帰りました。」

八木沼セツ子姉妹急逝される



1964年より北部極東伝道部、68年から日本沖縄伝道部、70年からは日本中央伝道部で、通算8年の長きに亘って、伝道部扶助協会、第一副会長として、日本に於ける扶助協会の発展の為に全力を尽して働いて来られた、八木沼セツ子姉妹は、1月23日、名古屋で開かれた中部地方部大会で、力強い、信仰にあふれた証詞をされましたが、翌日の夜、突然病にたおれ、1月30日午前5時、霊界に召されました。彼女の残された立派な功績の内には、彼女が沖縄や北海道の大会にも参加出来る様助けられた御主人の協力があったことを見過すことは出来ません。

遺族の方々は、御主人常三郎氏、長女慶子姉妹、悠紀子姉妹、修一兄弟（西部伝道部第二副伝道部長）、信二兄弟で、上の3人は夫々家庭を持たれております。住所は名古屋市千種区鍋屋上野町東山鍋屋上野住宅4-204です。

全日本伝道部副伝道部長会議

1月13、14の両日、日本の4伝道部から6人の副伝道部長が参加して、神戸の日本中央伝道本部で、初の会議が開かれました。

今後の日本に於ける教会の発展の為に、有意義な討論が、深夜迄おこなわれ、翌日は又予定時間をオーバーし、再会を約して会議を終えました。



名古屋支部 鍬入式

1月22日、待ちに待った名古屋支部の鍬入式が200名の参加の元、盛大におこなわれました。秋風の立つ頃には、立派な教会がこの地に建ちます。

現在の支部の集会場は、名古屋市中村区西柳町1丁目1番地の3、愛三ビル2階



「なごやかさの中の厳粛さ」

仙台支部献堂式挙行さる

年の瀬を迎えた十二月十六日、雪国には珍しい穏やかな夕べ、待たれていた仙台支部教会堂の献堂式がジェームズ・A・カリモア十二使徒補助によって執り行なわれた。日本人特有の悲壮感もなく、なごやかな雰囲気の中にも靈感と厳粛なよるこびに溢れた集会であった。

約十か月の工事期間を経て、昨年三月に完成した新教会堂は、四月三日に内外の名士、関係者を招いてオープンハウスを行なった。しかし、献堂式は、幹部の日程の都合でなかなか機会を得ず、秋に予定された会も、都合で延期され、ようやく今回のよるこびとなったものである。

仙台支部の建築は、宣教師館の建築を含めると約一年四か月にわたったのであるが、従来の経験と異って、のんびりしたムードに満ちていた。というよりは、切迫感や悲壮感にと

らわれなかったといった方がより適切であろう。

これは東北人の性格というよりは、建築前の長い準備期間で培われた余裕と自信のようなものが全体を包んでいたためであろう。

天候に苦しんだことも殆んどなかったし、経済的な困難も大きくはなかった。いざという場合には全てをなげうっても……と秘かに決意のほどを固めていた経験豊かな会員たちも最後の切り札を出すことなく完成を迎えたわけである。

しかし、振り返って考えてみると、そこには極めて大きな神のみこころが働いていたことを知ることができる。

まず、労働奉仕という面では、若い兄弟姉妹たちがよく働いた。古い会員たちはどちらかといえば、後押しの役に回った。若い会員たちは、自分たちの後に経験者たちがいるので安心して思う存分働けた。しかも、義務としてでなく、あくまで自由な奉仕として働いた。今、それは彼等の大きな誇りとなっている筈である。

一方、経済的な面においては、家族数も決して多くない不利な条件のもとで、友愛バザーの爆発的な成功と広く会員たちに訴えて寄せられた芳志の数々によって一挙に目標額に達し得たのであった。これは、支部創設以来の長年にわたる資金獲得のための努力と奉仕とがここに至って開花したのであって、一朝一夕にして得られる成功ではなかった。仙台支部の歴史の深さと幅の広さを見る思いがする。

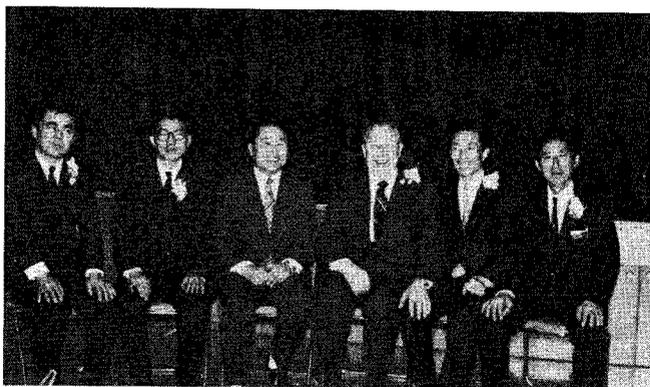
支部負担額を全て達成し、労働奉仕を全て終えて、汗ばむほどの暖かさ、まばゆいほどの輝やかに満ちた会堂の中で歌に祈りにダンスに卓球に演劇に冬を過ごす仙台支部の会員たちの心はさわやかである。しかし一方、悔いも残る。ギリギリの所まで追いつめられた感じは少しもなかった。自分にはまだ余力があった。義務感で働いたのではなかっただけに余力は悔いとなる。トコトン働きたかったと思う。今、仙台の会員たちは、時間を作って松本へ京都へと手伝いに出かけはじめている。誰が勧めるのでもないのに……。

仙台の支部長会は他支部の建築資金獲得のため働きはじめようとしている。

教会はひとりひとりのものであり、みんなのものである。だから教会堂もみんな建てみんなのものとなる。仙台支部はこの簡単な教えを実行して成功した。この経験を土台にやがてより広い世界の人々のために働く日が来るに違いない。



献堂式に集った幹部関係者たち



歴代支部長の勢揃い

向って右より、渡部正雄（初代）、福田濃（二代）、カリモア十二使徒補助、紙谷富傑（三代）、阿部順夫（四代）
斎藤和雄（五代、現）各支部長

福音を勉強しよう

汝ら最も善き書より智恵ある言葉を探し求めよ (DC88:118)

およそ、われらのこの世に於て達する英智の一切は、何にてもよみがえりの時われらと共によみがえるべし。さればもしある人ありて、精励従順によりこの世に於て他の人よりも一層勝れたる知識と英智とを得ば、未来の世に於てそれだけ利を得べし。(DC130:18-19)

新しく教会に入られた方へ

教義と聖約・高価なる真珠	250円	回復された真理	180円
信仰簡条の研究	330円	福音の紹介	170円
讚美歌 (ポケット版)	350円	奇しみわざ	270円
末日聖徒とは	720円	やさしい福音	540円

聖書を学びたい方へ

キリスト・イエス (上・下)	各300円	わたしたちの救い主	540円
主の教会	360円	われに従え	540円
主の歩み	360円	家庭の夕べ (1970-71年)	130円
古代の使徒	220円		

モルモン経を学びたい方へ

昇栄への道	360円	家庭の夕べ (1969-70年)	90円
真理の泉	360円	私はなぜモルモン経を神の御言葉と信じるか	7円
モルモン経の手引き	270円	モルモン経を証しする人々	4円
モルモン経の新研究	330円	モルモン経が世に問うチャレンジ	2円

結婚について学びたい方へ

結婚	350円	主の宮居	450円
結婚生活へのアドバイス	360円	エラ神殿特集号 (英文)	500円

親として読んでおくべき本

家庭の夕べ	200円	家庭における神権の発揚	150円
子供に教えるには	60円	家督権の祝福	100円
愛の福音	720円	完成への道	500円
福音とともに	720円	福音の教義 (I・II)	各160円
成長する子供たち	40円	扶助協会テキスト	200円
神権とあなた	450円		

教会を紹介したい方へ

絵でみる末日聖徒イエス・キリスト教会	160円	背教と福音の回復	4円
モルモン経	250円	万博「幸福を探し求めて」	8円
家庭の夕べ	200円	世界の教会	8円
予言者ジョセフ・スミスの証	9円	モルモン経パンフレット	8円
救いの計画	9円	信仰簡条のカード	5円
知恵の言葉	9円	知恵の言葉のカード	5円
どの教会が正しいか	9円	幸福への道 (英文)	540円

ご注文は代金とともに東京ディストリビューションセンターへ

〒106 東京都港区南麻布5-10-25

TEL 442-7459

ルカ23：26～34

彼らがイエスをひいてゆく途中、シモンというクレネ人が郊外から出てきたのを捕えて十字架を負わせ、それをになってイエスのあとから行かせた。

大ぜいの民衆と、悲しみ嘆いてやまない女たちの群れとが、イエスに従って行った。イエスは女たちの方に振りむいて言われた、「エルサレムの娘たちよ、わたしのために泣くな。むしろ、あなたがた自身のため、また自分の子供たちのために泣くがよい。

『不妊の女と子を産まなかった胎と、ふくませなかった乳房とは、さいわいだ』と言う日が、いまに来る。そのとき、人々は山にむかって、われわれの上に倒れかかれと言い、また丘にむかって、われわれにおおいかぶされと言い出すであろう。もし生木でさえもそうされるなら、枯木はどうされることであろう。

さて、イエスと共に刑を受けるために、ほかにふたりの犯罪人も引かれていった。されこうべと呼ばれている所に着くと、人々はそこでイエスを十字架につけ、犯罪人たちも、ひとりは右に、ひとりは左に、十字架につけた。そのとき、イエスは言われた、「父よ、彼らをおゆるしてください。彼らは何をしているのか、わからずにいるのです」。人々はイエスの着物をくじ引きで分け合った。

ヨハネ19：16～22

そこでピラトは、十字架につけさせるために、イエスを彼らに引き渡した。

彼らはイエスを引き取った。イエスはみずから十字架を背負って、されこうべ（ヘブル語ではゴルゴタ）という場所に出て行かれた。彼らはそこで、イエスを十字架につけた。イエスをまん中にして、ほかのふたりの者を両側に、イエスと一緒に十字架につけた。ピラトは罪状書きを書いて、十字架の上にかけさせた。それには「ユダヤ人の王、ナザレのイエス」と書いてあった。イエスが十字架につけられた場所は都に近かったので、多くのユダヤ人がこの罪状書きを読んだ。それはヘブル、ローマ、ギリシヤの国語で書いてあった。ユダヤ人の祭司長たちがピラトに言った、「『ユダヤ人の王』と書かず、『この人はユダヤ人の王と自称していた』と書いてほしい」。ピラトは答えた、「わたしが書いたことは、書いたままにしておけ」。

